

---

# クライシスマじっく！

月見 岳

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

クライシスマジック！

### 【Zコード】

Z9552G

### 【作者名】

月見 岳

### 【あらすじ】

第一部・なんだか記憶を取り戻した春樹。

だからと黙つて何をするわけでもなく、普通に高校生として生活をしていました……めでたしめでたし、なーんて終わるわけもなく、やっぱり色々巻き起こすのでした。

山奥の学校を舞台に、剣と魔法と現代兵器が入り混じる、ファンタジックアクションコメディー！第一部未完で終了。また時があれば再始動。

## プロローグ 『始まりは突然に』

いつも通り。

今日も明日も、昨日と同じ一日が続くものと思っていた。  
佐久良春樹はいつも通りの時間に起き、そしていつも通りに学校に向かおうと思い、外界へと繋がるドアを開いたのだが、その日はいつもと少し違っていた。

その違いとは、目の前に突如として出現した少女。

別にこれと言つておかしいところはない。  
ドアを開ければ、自分と同年代であろう女の子がいただけだ。これが玉乗りをしているピエロだったりとか、グレイ型とか言われる宇宙人だつたりしたら、流石にどんな鈍い人でもおかしいとは思うだろうが……。

しかも、どうやら少女は美少女という類の人間なのか、なかなか可愛らしかった。ただ、栗色の髪が、寝ぐせなのかどうか分からないうがボサボサで、至る所が跳ねに跳ねまくっているのは愛嬌ということにしておこう。

そして、ふと浮かぶ疑問。

なぜこのような場所に少女がいるのだろうか？

泉綾学園高校の生徒寮。楠木寮。しかも男子寮である。そんなむさ苦しいであろう場所に、女の子が来ること自体おかしかった。しかも、その少女は泉綾学園高校の女子の制服ではなく、この寮にいる男子生徒の彼女が迎えに来たといった様子でもない。

第一、この周辺の学校の制服ですらない。

その格好は、夜ならみえないであろう上下真っ黒の服装。朝でも既に蒸し暑く感じるこの季節に肌を隠す長袖だ。しかも革の黒手袋までしている。

まるでサスペンスに犯人として出てくるような格好。そして一幕。怪しさ満点だった。

「…………」

楠木寮の玄関を開き、ドアノブを掴んだまま春樹は固まっていた。

「…………」

そして、怪しそ満点の謎の少女Aも固まっていた。  
交差する視線と視線。

謎の少女Aが、わなわなと体を震わせたと思いつく、

「見つけたあー！」

朝の町に響き渡るような大声をあげた。

謎の少女Aは春樹の肩を掴むと、怖い顔をして春樹の顔に近づけた。

「今までなにをしていたのー！連絡すらないしーみんな心配しているんだからー！」

矢継ぎ早に浴びせられる言葉に、春樹は戸惑った。

「ああ、早く戻りましょー！」

腕をクイクイと引つ張り、春樹を学校とは違う方向へ連れて行こうとする。

「ちよ、ちよっと待つてくれー！」

春樹は、謎の少女Aが掴む手を振り払つよつとして抵抗する。し

かし、思いのほか謎の少女Aは握力が強いのか、なかなか振り払うことのできない。

「なに?」

「さ、君はオレのことを知つて、いようだが……知り合いか?」

春樹の言葉に、謎の少女Aはぴたりと動きを止めた。

まるで一時停止ボタンでも押したかのような感じで、そこだけが時間がとまったかのようだ。

そのおかげで、春樹は掴まれていた腕を簡単に振りほどくことができた。

「……一体どうこう」と

謎の少女Aは、絞り出すような声で呟いた。フルブルと俯き加減で体を震わせている。

「いや、なんといつか……オレ、この一ヶ月以降の記憶がないんだよ」

「……え?」

謎の少女Aの目が点になる。

「……」めぐ、もつ一度

聞こえなかつたのか、それとも自らの耳を疑つてゐるのか、謎の少女Aは再び答えを求めてきた。

仕方なく、春樹は答えた。

だから、記憶喪失なんだよ

ଶାଶ୍ଵତାବଳୀ ଅନୁଷ୍ଠାନିକ ପରିକଳ୍ପନା ପାଇଁ

謎の少女Aは、街中に響き渡るのではないかと思つぐらい、大きな声で叫んだ。

「なんでー、うそでしょー、うそでしょー、なぜー、なんどよおおー。」

同じような言葉をいながら春樹に掴みかかる

「知るか！オレが知りたいくらいなんだよ！」  
「せつかく見つけたのに！こんなのがんまりだああ！」

ポカポカと、春樹の胸を叩く。まつたくと言つて痛くはない。それよりも、春樹はこの謎の少女Aが、なぜ自分の事を知つているのか気になつていた。

「見つけたとか言つていたが、オレのことを探していたのか？」

叩く動作をやめた謎の少女Aは、キヨトンとした表情して春樹の顔を見た。

丁度上目へかいて看板を見る位置だったのでも、その表情にかなり胸に来るものがあった。

「すまないが、オレの事を教えてくれないか？頼む」

「へ？ べつにい」

そこまで言つて、突然言ひよどむ。

しかも、なにやらぶつぶつと独り言を言つていたりする。

悪いと思ひながらも、春樹は聞き耳を立てた。自分のことがかかっているのだ。仕方がない。

記憶がないと云うのは、もしかしてチャンスなんじゃないかな？ そ  
うだよね、だつてこれでやつと

「よし、決めた！」

そして、少女は高らかと宣言した。

「私は、側から離れない！」

律儀に春樹を指差して、謎の少女Aはそつ宣言しきつてくれたの  
だった。

## 『スニーキングー』 1

あの意味の分からぬ出来事から一日たつた。その後もあの後、謎の少女は春樹の前から風のように去つていき、その後もなにもアクションはなかつた。

授業も普通に行われたし、昼休みの食堂もいつも通りの光景だつた。週に一度の男子による女子対策会議たるものも行われた。寮に戻れば、いつもは無愛想で寡黙なルームメイトに鋭い視線をビシリシと受けながら、朝の出来事について根掘り葉掘り尋ねられた。

当の春樹は、自身にもいまいち状況把握が出来ていなかつたので、ルームメイトの刑事並みの追求に、ベテラン政治家のごとくのらりくらりと交わしていくしかなかつた。しかし、それがルームメイトには気に入らなかつたらしく、時間がたつにつれて追求は厳しさを増し、刑事ドラマさながらの取り調べとなつていつたのだ。

深夜まで続いた取り調べのおかげで、若干寝不足気味だ。

「……ふあ……」

隣から、可愛らしい声が聞こえた。

素直に隣に顔を向ければ、ルームメイトの成瀬<sup>ナルセ</sup> 夏依が欠伸をしていた。

中性的で凜々しい顔つき、小柄で華奢な体格をしている。

何度も、こつそり牛乳をがぶ飲みしているのを見かけたことがあるので、コンプレックスとなつていいのだろう。

「なんだ佐久良。人の顔をジロジロ見るな

ふん、と鼻であしらつた。

冷ややかな目が春樹に向けられていた。

「いや……なんかすまん」

「分かればいい」

すると、夏依はぱいつと前を向いてしまった。なんだか、不機嫌才ーラが強くなつた気がする。

クラスメイトであり、ルームメイトであるし仲良くしたいのは山々だけど、編入してから二ヶ月たつた今も、心を開いていないようだ。でも、こうやって一緒に登校するようになつたのは、ある程度は心を開いているということだよな……？

とりあえず、春樹は自分で自分の中でその皿「完結」をした。

「ときには春樹」

「なんだ」

「なにか……視線を感じないか？」

それはお前のせいだろ。

なんて言つたつて、夏依は俗にいう美少年だ。女子生徒からの人気は高く、上級生の女子生徒からの熱い視線はかなりのものだ。

それと対照に、春樹には殺氣立つた視線と、恐怖と恐怖の視線が突き刺さつていた。

佐久良 春樹、編入一ヶ月にして完全に孤立していた。

まあまあ顔立ちは整つていて、猛禽類を彷彿とせる鋭い目つき、そして僅かに見える犬歯が、すべてを悪いベクトルにしていた。

女子生徒には怖がられ、声をかけたら『ヒッ！』と悲鳴をあげて逃げ出す始末。

始めのうちはかなりへこんでいたが、今になつてはもう慣れた。いや、実際は諦めの境地に至つたのであるが。

「多分……気のせいだろ」

「そうか？全身を舐められているような感覚があるんだが……？」

それは、後ろを歩くお姉さま方の視線だらつ。

まあ、春樹には恐怖するような視線しか感じない。

恐怖だけでなく、敬意が欲しいものだ。実際に、敬意を示されても困るけど。

そんな視線も、たかが寮から学校までの数十メートルの距離を我慢すればいいだけだ。その後は、教室で自分の机に突っ伏してしまえばいい。そうすれば、春樹に注目がいくことはない。

何事も、目立たないことが一番だ。

しかし、教室に至るまでに一つ難所があった。そしてその難所が目前に迫ってきた。

「来たわね！」

校門付近から、甲高い声が響きわたつた。朝の喧騒でもよく聞こえる透き通つた声だ。

その声を聞いた春樹は、疲れたような顔をしてため息をつき、夏依は露骨に顔をしかめて不機嫌オーラを倍増させた。

声の発信元には、一人の女子生徒が「王立ちしていた」。

腕には『会長』という腕章をつけて、黄色のリボンで髪をツインテールしており、目はつり上がってキツい印象がある。

「あ～～、おはようござこます生徒会長」

「とつとと帰りなさいー！」

「会長、おはようござこます」

「おはようござこます成瀬君」

春樹が挨拶をしても、敵対心純度100%だったのに、夏依に対し

ては愛想100%の挨拶を返すのですか……。

夏依が春樹の方に顔を向け、『大変だなお前も、頑張れよ』といいつげな目をして、スタスターと先に行ってしまった。

見捨てるのか……何時ものことだけ。

「じゃ、急いでますんで」

特に急いでいないのだが、この場からサッサと去りたかったのだ。

「芽衣ー」

「ハツー！」

その瞬間、春樹の首に竹刀が当てられた。

「すまないが、動かないでくれるな？」

有無を言わさぬ雰囲気を纏つた口調だった。拒否しようならただでは済まないと副音声で聞こえる気がした。

春樹は頭だけを動かし、竹刀を突き立てる女子生徒を伺う。

同じ様に腕には腕章、しかし書かれた文字は『風紀』となっている。長身で、尾を長く垂らしたボニー・テール。凛々しい顔つきで、今は目が細められて春樹を捉えていた。

「何するんです、剣岳先輩」

「薰会長の指示を実行に移したまでだ」

ああ、まったく。結局こつなつてしまつたか。

思わず、春樹は天を仰ぎそうになつた。

『会長』という腕章をつけているツインテールは、二ノ宮 薰といふ。生徒会長である。

そして『風紀』の腕章をつけているポーネテールは、剣岳<sup>ツルギダケ</sup>芽衣といつ。風紀委員長である。

春樹は心の中で彼女らを『三本尻尾』と言っている。無論、皮肉をこめてだ。

「で、何か用ですか会長?」

芽衣に竹刀を下ろしてもらい、渋々と言つた様子で春樹は振り返つた。

そこには、断崖絶壁の胸を張る薰が仁王立ちしていた。

「これ!」

突き出されたのは一枚の紙。

見事な達筆で文字が書かれているが、出来れば認識したくない。

「何です……これ」

「決まつてゐるじゃない。退学届け」

さも、当たり前と言つた表情を浮かべ、春樹に無理やり押し付けた。

「後、あなたの名前を書いて、校長に渡せばいいから

「いや、書くつもりはない」

「書きなさい。というか書け。それが、世のため学校のため、そして生徒のためなの」

酷い言われようだが、春樹にとつては何時ものことだ。

何故か、この生徒会長様は登校するたびに退学を迫つてくる。学力は高い方だし、これといった問題行動もしていない。至つて普通の男子生徒だ。記憶喪失で仮名であること以外は。

何故、退学を迫られないといけないのだろうか。

無理やり持たされた退学届けを問答無用で引き裂き、更にそれを重ねて引き裂く。これで四等分。

それを見た薫が何やら騒いでいるが、春樹は気にしない。

何度も引き裂いて細かくしていく。

細かくなつた退学届けは、風に舞つて飛んでいく。

「ちょっと、何するのよ」

「まったく、やつてられん。毎回同じネタをやつて……飽きたぞ」「ネタじゃないわよー全く、いい加減に自主退学してくれないかしらねー！」

「これから先も退学の予定はないな」

とまあ、こつもこんなやつとつをしていく。  
平和そのものである。

「さて、今日も一日頑張ろー」

「あ、コラ待ちなさいー！」

やる気ない棒読みで拳を上げ、スタスタと学校の敷地に入つていく。

薫が追いかけようとするが、女子生徒に挨拶され、持ち場から離れることが出来なかつた。

生徒会長としての責務だろうか。

「へへ、今度こそ退学に追い込んであげます……！」

この誓いも、昨日も一昨日もたてたものと同じだった。

## 『スニーキングー』 2

見た目からは想像できないが、佐久良 春樹は勉強は出来るほうである。

予習復習はきつちりやる真面目君つぶりだ。

しかし、それとこれとは別。例え勉強ができたとしても、人間関係はまた別なのだ。

「…………」

春樹は、自分の席について外を眺めていた。

木々の緑が華やいで見え、雲一つない青い空が広がっていた。

というより、それしか見えない。

鉄筋コンクリート製の建物は勿論、木造建築物すら見えない。つまり、存在しない。

春樹が在籍する泉稜学園高校は、山奥にある全寮制の高校である。それ故か、生徒たちによる自治活動が他校より行われている。

警察署や消防署、病院は遙か彼方。緊急車両で一時間はかかるのだ。つまり、自分達の問題は自分達で解決しなければならない。それ故、生徒たちの自治が活発なのだ。

自治を行つのは主に『生徒会』である。無論、学園における権力は絶大だ。

だからこそ、生徒会役員の選定は厳密に行われる。

まず、生徒会長選挙が開かれ、全校生徒による選挙が行われる。これで『生徒会長』が選ばれる。そして、その選ばれた生徒会長が自ら生徒会役員を指名し決めていく。アメリカの大統領制のような感じだ。

協議を行つ議会は、各委員会で選出された各委員長、運動部連合、文化部連合などが加わり、議会は形成されていた。

協議が行われる会議室が、大きな円卓が置かれ、それを使って行われているため、『円卓』とも議会は呼ばれていた。

ただ、そんな事は春樹にどうでよかつた。

政治の真似事には興味はない。ほっておけばどうにでもなる。

普通にしていれば関係ないことなのだ。

「おい佐久良。ちょっとといいか?」

ポンヤリ外を眺めていたら、夏依が春樹の肩を叩いた。

「ん?なんだ?」

「少し用事が入つてな。今日は寮に戻るのが遅くなりそうなんだ。

その事を寮長に伝えといてくれ

「……そういうのは寮を出る前に言つとけよ

「仕方ないだろ。急に用事が入つたんだから」

夏依は少しむくれると、ふいっとそっぽを向いて自分の席に行つてしまつた。

どうやら、拒否権はないようだ。

春樹が溜め息をついたとほぼ同時に、担任教師が入つてきた。

「ハイハイ、席につけ~」

ざわざわと教室内の生徒が動き出し、自らの席につく。

教壇の真ん中で、見事に男女に分離された席順となつた。

実は、泉稜学園高校は元々は『泉稜男子学園』と『泉稜女子学院』の二校があつた。しかし、時代と少子化の波に押され、この春、その二校を合併共学化した。

元々その二校は隣合つており、それを隔てていた壁を破壊して『泉稜学園高校』となつたのだが、生徒達は戸惑つた。

今まで同性しかいない環境だったので、異性との『ミミコニケーション』の仕方が分からぬ。

その結果、春樹のクラスでは男子と女子が互いに牽制しあい、席が真つ一つという状況になったのだ。

まあ、男子陣営は融和（という下心）を目指しており、『女子対策会議』たるものを開いたりしていた。

途中編入の春樹は、これといって異性との『ミミコニケーション』に困らない（とることが出来ない）ので、嫌々ながら会議に参加させられていた。

「今年は珍しい。また編入生がやつてきたぞ」

担任の言葉に、再び教室内がざわめいた。

二ヶ月前に春樹が編入してきたばかりなのに、再びこのクラスに編入生がやってくるのだ。本来なら、編入生は別のクラスだろう。

「入ってきなさい」

そして、入ってきた編入生の”少女”を見た途端、春樹は目を見開いた。

こんな漫画みたいな展開、許されるのだろうか？

「どうも、兵庫県から来た久遠<sup>クドウ</sup> 奏です。皆さん、よろしくお願ひします」

少女は、昨日であつた謎の少女Aだった。

ねえねえ、奏さんは兵庫県から来たんでしょう？遠いね。

兵庫県のどのあたり？神戸？

その髪つて染めてるの？地毛？

女子連中がワイワイと固まっておしゃべり中。  
その中心には、謎の少女A もとい、久遠 奏がいる。

「確かに遠かつたよ。五時間ぐらいかかっちゃた」

「ううん、播磨地方。兵庫県の姫路市に近いらしい」

「地毛だよ。染めてない」

奏は一つ一つ質問に答えていた。

ただ、女子にすっかり囲まれて戸惑つているようだ。

一方、男子陣営の側も新しい女子のクラスメートに興味があるようだつた。何人かの男子が、何度も声をかけようとしていたのだが、分厚い女子の壁を前に引き返す者がほとんどだった。  
ヘタレばっかだな、おい。

「くつ、女子のブロックが厚い……！」

春樹の前席で、丸ぶち眼鏡の男子生徒が呟いた。

「うなつたら、秘密兵器投入だ」

そつして、春樹の方に向いた。

「行つてこい。春やん」

「拒否する」

考える素振りもなく答えた。

「な、何故だ春やん。女の子に興味はないのか！」

「……なら三谷、お前はあるのか？」

「当たり前だ！興味津々だぞ、俺は」

彼 三谷 弘樹は下心満載のようだった。

『女子対策会議』の発案者であり、議長である弘樹は、男子連中が女子との“お付き合い”ができるよう努力しているが、それは表の顔。

裏の顔は、女子と接触し、あわよくば己の好感度をあげて”ウハウハハーレム”を形成しようとしているただの変態である。

見た目は、メガネをかけてクールな感じなのだが、その見た目を裏切るその変態ぶりはまさに詐欺である。

無論、既に弘樹は女子生徒にドン引きされ、危険人物としてブラックリスト入りしているらしい。

「なら、自分で行けよ」

「それは無理だ。確実にな」胸を張つて弘樹は答えるが、そんな自信は悲しいだけだ。

「頼む、お前ならあの壁を破れる。そりゃ、モーゼの」とく

弘樹が押るようにして手を合わせている。

そんなに頼まれても、春樹は受け入れるつもりはなかつた。

確かに、春樹が行けば女子のブロックなんて自然と割っていくだろう。

ただ、それは春樹が恐れられているという再確認としかならない。

誰だつて、傷つきたくない。

「夏依に頼んで見ろよ。アイツなら女子に人気あるから大丈夫だろ」「あ～～、ダメだつた。『そんなんつまらない用事でいちいち人に頼むな』つて断られた」

まあ、あいつならそう言つだらうな。

根はいいやつなのは知つてゐるけど、相変わらず言葉に棘がある。

「な、頼むよ。お前だけが頼りなんだよ」

「くどいぞ三谷」

その後も、弘樹は何度も頭を下げるが、頑として春樹は首を縦に振らない。

「くそ、臆病者が！ もういい！」

弘樹はそういう捨てると、女子の壁に単身で向かつていつた。  
そして、星になつた。

全く持つて馬鹿馬鹿しい。そんなに田をギラギラさせて飢えているから、女子が距離を置くんだ。  
なぜ、そんな事に気付かないのだろう。

「全く、逆効果だつて事すら気付かないのか」  
「きつと、気付かないくらい一生懸命なんだよ」

ただ、独り言のつもりで呴いた言葉に返答があつた。  
横を見ると、流れるような栗色の長い髪が目に入った。  
視線を上にすると、笑顔の久遠 奏がそこにいた。  
後ろの方で、女子生徒達がハラハラドキドキといった感じでコツチ

を見ているのが分かる。

別にとつて喰つたりはしないさ。

「何のようだ」

「何のようだなんて酷いなあ～」

存外だといった感じで、奏は笑つていた。

「クラスメートと親睦を深めたいんだよ」

「なら、他の人と深めてくれ。大喜びすると思ひや。そこに倒れて  
いる眼鏡の男とか」

「それはちょっと遠慮したいかな」

どうやら、弘樹は奏のブラックリスト入りをしてしまつたようだ。  
まあ、自業自得なのだけれど。

「私は君と仲良くなりたいの。佐久良 春樹君」

「……ほう、何故オレの名を知つてる」

「知つてるよ。あなたの”名前”はもちろんね」

「……」

”名前”

そこの言葉に、かなり含みがある気がする。

確かに、『佐久良 春樹』というのは仮名である。

戸籍を作るため、家庭裁判所に就籍許可申請をして裁判所が決めた  
名前だ。

だが、奏はこの『佐久良 春樹』といつ名前でなく、本当の名前を  
知つてているというのだろうか。

いや、確實に知つてているのだろう。昨日のことを考えれば。

自然と春樹の目つきが、奏を射抜くような鋭いものになっていた。  
そんな春樹の鋭い視線を物ともせず、奏は笑顔でいる。

外野の女子生徒達は、いつにない緊張感に支配されたりするの  
だが。

「……はあ」

なに喋喋喋喋してるんだ。

春樹は急に馬鹿らしくなつてため息をついた。

「ため息は良くない。幸せが逃げるからね」「これ以上、逃げていく幸せなんてないからいいさ」「ダメ。あなたにはこれから幸せになるんだから」

なにを言つてるんだ。この女は。

「やつ、だから私がそばにいるのだから  
「……は？」

一体どうこう意味だ　　言い知れぬものを感じ、春樹がそう言おつ  
とした時だった。

「や、佐久良。ちょっといいか」

春樹と奏の間に割り込むようにして、夏依が体を入れてきた。  
奏が少しムツとする。

「ん? なんだよ」

「ち、ちょっと用事があるんだ。き、来てくれないか」

グイグイと春樹の袖を引っ張る。

「分かった。分かったから袖を引っ張るな。伸びる」

春樹は腰を浮かせて席を立つ。

夏依に引っ張られるまま教室から出て行つた。

なんだか不満そうな表情の奏が、教室に一人残された。

## 『スニーキング!』 3

転校生、久遠 奏は不満だつた。  
せつかく話していた目的人物が、突然現れた男子生徒に連れて行か  
れてしまつたからだ。

（もう、せつかく話してたのに……！）

内心腹を立てたような顔をして、奏は春樹達が出て行つた教室の出  
入り口を見ていた。  
そんな時だつた。

「ねえ、久遠さん大丈夫！」

先ほどまで、外野で心配そうに見つめていた女子生徒達がやつて來  
た。

「大丈夫だけど……なにが？」  
「だつて恐いでしょ、佐久良君」  
「そうそう、お金とか要求されなかつた？」  
「後で体育館裏に来いとか言われなかつた？」  
「行つちゃダメだよ。弄ばれるよ！」

本人がいなることをいいことに、好き放題言つてくれる。  
実際、春樹はそんな事をしたことはないのだが、そのみでくれから、  
女子内部でならぬ話が錯綜しているのでだ。

「そんな事、するような人には思わないよ

奏の言葉に、女子生徒達は心底驚いたような表情をした。

「あの顔よ？ チンピリのものなのよ？」

うんうんと周りの女子生徒達が頷いた。

「人は見かけで判断出来ないよ。実際に、彼にそうされたって被害はあるの？」

「…………」

その言葉に、女子生徒達は言い返せず、沈黙するしかなかつた。

「確かにそうね」

「ええ、佐久良君は何もしてません」

「ずっと、外を見てボーっとしてるだけね」

「そういえば、なんか雰囲気あるよね。大人の余裕というか」「確かに、他の男子みたいにがつつかないしね」

「食べてない」

うんうんと女子生徒達は頷いた。  
なかなか春樹の評価があがつてきていた。

「考えてみれば、私達、佐久良君のこと見た目だけで決めつけていたわね」

「実際、冷静に見てみると怖い人じゃなさそうだし」「何も知らないのに決めつけていたわね」

「うん、成瀬君にも悪いことしたね。連れ出すように頼んで……」

その女子生徒の発言に、奏はんつ？と眉を細めた。

さつきの発言が引っかかったのだ。

「ねえ、成瀬君に頼んだってなに？」

「あ、うん。佐久良君を連れ出してもらひよつにね。久遠さんを救うためと思ってやつたんだけどね」

女子生徒は、はははと苦笑いをした。

「無駄だつたね……つてどうしたの久遠さん。怖い顔して「そ、そんなことないよ~」

知らない間に顔が引きつっていたようだ。

いけないいけない、笑顔じやないと。

『よくも余計なことをしてくれたな』つて言いそうになつたけど、何とか踏ん張つたんだ。

「やつぱ怖いよ、顔」

いけないいけない。

奏はくにくにと顔をマッサージする。

「ごめんね、なんでもないから」

「う、うん。別に私達が謝られる」とじやないよ

そんな時、チャイムが鳴つた。

休憩時間の終了だ。

「ごめんね。

口々に女子生徒達はさつ言つて自らの席に戻つていく。

女子生徒達が去つた後、気付けば奏は自分の机に拳を叩きつけて、盛大な音を立てていた。

ああ、どうしようどうしよう……。

いつになく、成瀬 夏依は焦っていた。

「おい、用事つてなんだよ夏依」

その焦っている原因は、夏依の後ろをついてくる見た目チンドリのルームメートにあった。

クラスの女子達に頼まれて、連れ出したはいいが、どうすればいい

かまで考えていなかつた。

全く持つて、とんでもない失態である。

いきなり連れ出してくれつて頼むのが無理な話なんだけど。

第一、女子達は佐久良のことを勘違いしているんだ。確かに見た目

はチンドリみたいな奴だけど、そつ悪い奴ではないんだ。

むしろ、いい奴だと思う。

人が困つているとさり気なく助けてくれるし、結構勉強できるみたいだし……。

「おい、夏依?」

「……！」

い、今なにを考えていた……。

確かに、このルームメートは信頼出来る男だ。二ヶ月だが共同生活をおくつて分かる。出来ることなら、隠している”秘密”を話してしまいたい。

「お~い?」

春樹の声で、再び夏依は我に返った。

今まで考えていたことを思い返すと、顔が熱くなるのを感じた。

冷静に冷静に。ポーカーフェイスを保たなければ。

夏依は深く深呼吸をして、春樹のほうに振り向いた。

「さ、佐久良。あのだな……」

そんな時にチャイムがなつた。

「あつ……」

「おっ、授業が始まるな。教室に戻るぞ」

春樹はくるりと身を翻し、教室に戻り始める。  
それを追うように夏依はついていく。

「佐久良……用事というのはだな」

何かないかと頭を巡らせるがなにも思いつかない。  
言つてみたはいいがどうしよう……。

「もう分かってるからいい」

「えつ？」

「どうせ、女子に頼まれたんだろう? 何とかして連れ出してくれって

夏依は目を丸くして驚いた。

まさか、気付いていたとは思わなかつた。

「その様子を見ると、そのようだな」

春樹がため息をついた。

その背中は、哀愁をたっぷり感じさせた。

「女子には嫌われるみたいだしな」

「そ、そんなことは……」

「いや、夏依が気にすることない。分かり切ってる」と

「そう言つが

「気にするなって言つてるだろ。他人にどう思われようがオレは関係ないから」

「…………」

夏依はそれ以上なにも言わず、春樹の後ろをついていく。

それにして、女子は何故みてくれだけで人を判断するのだろう。いい奴なのに……。

だけど、あの転校生は違った。

あの転校生は自ら話しかけにいつていた。まるで、昔から知つているように……。

それに、佐久良もあの転校生のことをなんだか知つてゐみたいだった。

どんな関係なんだろう。

佐久良は記憶喪失のはずだから、知り合つたのは最近だろうか？

そう言えども、昨日の朝に女性と会つていたみたいだけど、彼女なのだろうか。

問い合わせてみたけど、何も得る者はなかつた。

政治家みたいにのらりくらりと質問から逃れていくから、ついムキになつてしまつた。

でも、なんであんなにムキになつたんだる……？

やつぱり気になるんだろうな。

「…………」

途端、夏依は顔が熱くなるのを感じた。

いやいや、違う違う。気になるってのは、気にかかるっていうこと  
で……って同じことじゃないか！ そうじゃなくて、気になるのは気  
になるけど……やつ、心配。なんだか心配になるってことなんだ。  
ルームメートとして。

「夏依、なんかお前……おかしいぞ？」

「えつ？ そ、そんな」となこと思つた？」

「そうか？ まあいい、早く戻るつ。先生が来る」

「うむ、やつだな」

春樹の後ろをついて歩いていく。

少し、顔に残つた熱が妙に心地よかつた。

……見事に授業に遅れたけれど。

## 『スニーキング!』 4

「昼か……」

春樹はグイッと背中を伸ばした。

午前最後の50分授業が終わり、お昼休みになつた。

「夏依、食堂に行くか」

「ん、そうだな」

「あ、春やん。俺も行く」

春樹と夏依、そして弘樹は三人揃つて教室を出る。  
目的地は食堂だ。

この泉稜学園高校は、山奥といつ立地条件から寮生活をする生徒が多い。  
その事から、食堂を使用する生徒は多く、そして食堂の施設、規模  
が大きいのだ。

「……おい、佐久良」

夏依が、春樹の袖口をくいくいと引っ張つた。

「一人、後ろをついてきている」

「……なんだ」

ちらりと後ろの様子をうかがつた。

確かに、一人の女子生徒がいる。しかも、知つた人間だった。  
春樹につられて夏依も後ろを見ようとした。

「……振り向くな。気付かないふりしておけ  
「えつ あ、おい！」

夏依の頭を掴み、無理やり前を向かせた。  
不満そうな視線を向けてくる。

「春やん、どうかしたか？」  
「いいや、なんでもない。早く食堂に行こう。腹が減った」  
「お、おひ」

いつもより気持ち早く、スタスターと歩いていた。  
後ろでは、「ソソコソと奏がついてきている。  
廊下の端に隠れたり、柱の隅に隠れたり、教室の中に入ったり……  
可哀想だが、あれで隠れているつもりなんだろ。う。  
通り過ぎる生徒達に不審な目で見られているのに気付かずに。

食堂に入ると、既に人が混み合つて賑わっていた。

「夏依、B定食だろ？」  
「ああ、頼む」  
「よし弘樹、行くぞ」

夏依は席取り。春樹と弘樹は食料獲得という役割分担をしている。  
夏依の分は春樹が買っている。ルームメートのよしみだ。  
食券を一枚買つと、そのまま受け渡し場所に行く。

「おばちゃん、きつねうどんとB定食」  
「それとカツ定食！」

「あいよ」

しばらくして、きつねうどんとB定食が出てくる。  
春樹はそれを受け取ると、食堂全体を見渡した。  
人が沢山で、なかなか夏依を見つけることが出来ない。  
小さいから見えないのでどうか……。

「佐久良、ここだ」

「……おつ」

やつと見つけた。

どうやら夏依さんと席を確保できているみたいだ。

「いや、待たせた……な?」

そこには、夏依の他に一人の女子生徒の姿があった。  
こっちの驚く顔を見て、笑顔で手なんか振っている。  
隣に座る夏依に視線をやると、バツが悪そうに思いつ切り視線を逸  
らされた。

「あれ~、秦ちゃんじゃないか。俺達と一緒に食べるの?」  
「はい、お知り合いになりたくて」

そこで、なぜコツチを見る……！

春樹は奏に対して、小さな恐怖感を抱き始めていた。  
何故か付きまと「の少女。休み時間のたびにこっちに話しかけ、  
喉が渴いたと思って自販機に向かえばついてくる。男子トイレの前  
で待っている姿を見たときなんか背筋凍つてしまつた。  
そしてやはりといふか、昼食にも現れた。  
これが『ストーカー』という奴なのだろうか……。

「佐久良、なに突つ立つていいる」

「ん、ああ……」

春樹は夏依の向かいに座る。弘樹は奏の向かいだ。

夏依にB定食を渡し、自分のきつねうどんにかける七味を取る。

「おい佐久良、なんかやらかしたのか?」

「あ? なにを?」

夏依が小声で話しかけてきたが、どういう意味だ?  
すると、夏依は小さく自分の隣を座る人物を指差した。

視線をそちらに向けると、じゅ～～～～～～～～とじゅかりを見て  
くる奏の姿があつた。心なしか怒つていいようだ。  
……そんなに見るな、穴が開く。

チクチクと視線を感じつつ、うどんをすする。

「ところで久遠さんはお皿びつあるの? なにも買つてないみたいだ  
けど」

「あ、お気になさりず。私はこれですか?」

そう言つて机に出したのは、可愛らしいお弁当箱……なわけもな  
く、ただのバナナが一房置かれていた。

「えつと……バナナ?」

「はい、好きなんです」

「へえ……そり……」

この少女が少し分かつたのだろう。弘樹はただ引きつった笑いを浮  
かべていた。

「食べます？」

「え、遠慮するよ」

「春樹君は？」

「いらん」

「そつ……えへへと、アナタは

「成瀬 夏依だ」

「そう！成瀬君はどうですか？」

「……間に合つてこむ」

「そうですか……」

ションボリしょげてしまつた。

俯いて淋しくバナナの皮を剥いていた。

「おい佐久良」

向かいに座る夏依が小声で話しかけてきた。

「彼女……一体何なんだ？」

「何なんだつて言われてもな……。分からんとしか言ひよつがない」

「そなのか？彼女、佐久良のこと知つてゐみたいだが？」

「どうしても、俺には覚えがないからな……」

まあ、記憶 자체がないから仕方がないことかもしれない。  
ズルズルとうどんをすすり、最後に残しておいた油揚げにかぶりつく。

「お前が忘れているだけじゃないのか？」

「ふあふん、そーふあほは」

「なに言つてるか分からん。ちゃんと喰つてから言え」

春樹はもじもじと口を動かし、そして油揚げを飲み込んだ。

「多分、そうだろうな。俺が忘れているんだろう？」

「おいおい、思い出さないのか？」

「無理だな」

記憶喪失で一向になにも思い出さない。

昔会つたのであるう一人物を思い出せといつのが無理な話だ。記憶を思い出すキッカケになるだらうけど。

「じゃ、俺は先に教室に戻るから」

「お、おい」

そつ春樹は言つと、丼鉢を持って行つてしまつた。

「……あ、待つてください」

後を追うように、奏もバナナを持って去つていく。

残つた弘樹は呆然とし、夏依は不機嫌そうに頭を傾げていた。

……一体何だつてんだ！

午後になつても奏は春樹に付きまとつていた。  
さすがにここまで来ると、男子連中が羨ましそうに、そして妬まし  
そうにこちらを見てくる。とにかく視線が痛い。

正直、かなり迷惑だ。

だが、もうすぐ放課後となる。

そうなれば、楠木寮に真っ直ぐ帰つてしまえばこっちのものだ。

我らが帰宅部、万歳！

「じゃ、先に帰るな！」

「ああ、寮長に遅れる顔を伝えてくれよ

「分かつてゐる」

春樹は意氣揚々と教室を出て行つた。

後ろを付いてくる気配もないし、朝みたに校門の所に立つる『三本尻尾』はいない。

なんだか、今日は濃い一日だつた気がするな。

そう思いながら楠木寮までの短い帰り道を歩いていた。

だけど時はまだ夕方。春樹の1日はまだ終わらなかつた。

……残念なことに。

「どうー！」

突如、ガサガサと木の枝が音を立てたと思つと、木の上から一人の  
人間が飛び降りてきた。

そして、春樹の目の前に着地した。

黒の三角帽子を深く被り、どこかの学校の制服だらうセーラー服に

黒いマントを羽織っていた。

「誰だ？」

春樹の眩きに、彼女は人差し指を小さく振り、口端を少し上げた。

「ノンノン。 その質問には答えられないね  
「そうか、ならいい」

春樹はそのまま彼女の横を通り過ぎて行く。  
面倒ごとは関わりたくない。

不審者なら尚更だ。

「ウヒイトウヒイト！ストップブリーズ！スルーしないで…  
「つむつ……！」

突然、彼女は春樹の腕にしがみついてきた。

「……何だつてんだよ」「よ  
「ブリーズ。話を聞いてください」  
「分かつた、分かつたから離れる」  
「サンキュー」

なんで会話に片言の英語が混ざっているんだろう……。  
とりあえず、話は聞くとは言つたが何のようなんだろつか。  
そもそも、他校生がこの辺境の学校にいるんだろうか。  
そんな疑問が春樹の頭に浮かんでくる。

「いやいや、少し取り乱して抱きついてしまいました。ソーリーで  
す

「いや、べつにいい」

「そうですか、女の子に抱きつかれて逆にラッキーでしたか」

「…………えつと……？」

「私、着やせするタイプなんですよね。結構あつたでしょ、胸

こいつ一体何なんだよ！」

そんなの答えられないじゃないか！」

確かに腕に当たる感触は良かつたけどさー！

「まあ、そろそろ本題に入らせてもらいます」

「…………」

なんかもうやだ。この人。

「私がここに来た理由。他でもない、アナタ 佐久良 春樹さん  
に頼みたいことがあっての事です」

「頼み？」

「ええ、そうです」

そう言つと、彼女はいつの間にか長い杖のよつなものを握つていた。杖は彼女の肩くらいまでの長さがあり、先端には宝石のよつな青色の石がくつついていた。

まるで魔法使いが使うステッキみたいだつた。

そんな杖を春樹に向けると、一タリと口を歪めた。

「とてもイージーな」とです

死んでくれませんか？

背筋に寒気が走つた。

いきなりなにを言つてゐる」こいつは……一  
死んでくれだと……？

「 ッ！」

杖の先端の石が光つた。

直感的に春樹は横に体を逸らした。

春樹の横を何かが掠めていった。

「これはサプライズです。避けられるとは思ひませんでした」

「なにがサプライズだ！なにしやがつた！」

「ただのマジックですよ」

「さつきのが手品だつてか！」

彼女はムツヒロ元をしかめた。

「ノンノン、手品のマジックじゃなくて魔法のマジックですよ  
「は？魔法？」

いきなりなファンタジー発言に田が点になる。  
何故こんな電波な人に絡まれなければならぬのだろうか……。  
しかも、その訳わからないもので殺さそうになつてゐる。まったく  
泣けてくる。

春樹は自嘲するよつに笑つた。

どうも、絶体絶命らしい。

サスペンスなら、崖に追いつめられた犯人と言つたところか。

「さて、今度こそ死んでいただきます。サイロロステーキになるの  
と、ミンチ肉になるのどちらがいいですか？選んでください」

「……出来れば原型は残して欲しいんだがな」

「そうですか。サイコロステーキにしてミニチ肉にして欲しいと。

貪欲ですね」

「いやいや、望んでないからー。」

しかし、彼女は春樹に杖を向け、再び先端の石が光を放ち始めた。春樹は、じきに体中を走るだらう激痛を思い、思わず目を閉じる。

パン！

乾いた音が響き渡った。

何も起こらないので、春樹は恐る恐る目を開けた。

「……うお？」

最初に視界に入ったのは、風になびく栗色の髪だった。

少ししか会っていないが、見間違うことがないほど印象深い人物。久遠 奏は、いつになく真剣な表情だった。そして、その手には銃が握られていた。

その奥には、今まで表情を伺い知れなかつた彼女が、驚愕で目を見開いている姿があつた。

「大丈夫ですか春樹君」

「やはり久遠か……！お前一体

「話は後です！後ろに下がつてください」

奏は彼女に銃を向けたまま視線を外さない。春樹は素直に奏に従つた。

「さて、あなたは何者ですか」

「あなたこそ何者ですか？今時の女子高生はベレッタM92なんて

もつてませんよ」

「これは……携帯ストラップよー！」

さすがにそれはないだろ？

言い訳にしては無理がありすぎた。

「……まあいいでしょ？」

呆れた表情で彼女は言った。

「魔石も割られてしましましたし、イレギュラーもあつたので今は退くことにします」

その瞬間、とてつもない強風が吹いた。舞い上がった砂埃に思わず目を閉じる。この時、奏はスカートを必死に押さえていたけど、華麗に捲れたりしていた。

無論、目を閉じていた春樹には伺い知れないことだ。この強風は直ぐに止んだ。すでに、彼女の姿は消えていた。

「一体なんだつたんだ」

春樹は呆然と立ち尽くしていた。その横で、奏が強風でボサボサに乱れた栗色のロングヘアを直していた。

「大丈夫ですか春樹君！」

「ツ！」

奏の声で我にかえつた。

どうやら、田の前で起きた出来事を処理しきれていなかつたようだ。

「久遠、お前は何者だ。銃だつてもつているし  
「……ただの転校生ですよ。普通の女子高生です」  
「間があつたよな、今。それになんで銃なんか持つている?」  
「今は日本も銃社会なんですよ?」

そうなのか……？

記憶喪失の弊害たゞうか？

もしや 話題が先の前に詰む 犬木根を どうが どうで もしやのが か  
か……。

「俺は何故命を狙われねばならんのだ！」

「ああ、それは多分和のせい」

春樹は自分の耳を疑つた。

ヨイツのせいで狙われているのか……！？

確かに、やけに付きまとってくれるし、銃なんか持つてないし……。  
もしかして、とんでも無いことに巻き込まれているんじゃないんだ  
うづか?

そう思ふと、春樹は目の前にいる少女がどんなに無い疫病神に見え  
てきた。

厄介事はごめんだ。

「春樹君？」

沈黙する春樹を心配そうに覗き込んできた。  
じわりじわり、春樹は後退りをする。

「俺が命を狙われるのはお前のせいか……？」  
「えっと、多分そうです」

申し訳なさそうな奏の言葉を聞いた瞬間、春樹はクルリと方向転換。  
そして、一気に走り出した。

「あ、春樹君ー。」

「もう付いてくるな！厄介事に巻き込まれるのは『メンだーー。』

後ろから引き止める声がきこえたが、春樹はそのまま楠木寮まで走  
り去つていった。

## 『スーキング』 5 (後書き)

さつま、丹見 出です。これで、やっと一話が終わりました。一体  
どうなさいましたか……

## プロローグ2 『月夜の怪盗』

夜。

空には大きな満月が浮かび、月明かりを照らす。

ここは、日本でも有数な美術館であった。

昼間は老若男女たくさんの人達が見学にくる。なかでも、印象派の画家クロード・オネの作品『鈴蘭』は、たくさんの人だかりがいつも出来た。

だが、今は夜。もうすぐ日付が変わろうかといつころだ。

美術館は静まり返り、月明かりで幻想的に浮かび上がっていた。

本来ならば

「おい、人員の配置はどうなつていてる!」

「あへへもう! 本来なら休暇だつてのに」

「しょうがないだろ。人出がいるんだ」

「明日旅行だつたんだ。ああ、家族に後でどやされる」

赤色灯の赤い光と照明灯が照らす中、せわしなく沢山の人人が動き回つていた。

そのほとんどが警察官で、無線で連絡をとつたり、マスクの対応をしたりと大忙しだ。

その警察官のなかに、少し制服が違う人達がいた。この美術館を警備する警備員の方々だ。

「いいが、二ノ宮総合警備保障の威信にかけて、『鈴蘭』は守るぞ!」

『はい!』

一人の少女を中心に円陣を組んでいる警備員達が吼える。

「よし、各班配置につけ！」

『了解！』

ビシッと敬礼をし、警備員達は散つていった。  
その様子を確認した少女は、傍らに持つ木刀を握り締め、煌々と辺りを照らす満月を見上げた。

「……今度こそ、捕まえてやる」

怪盗ベル

少女 剣岳 莺依はそう呟いた。

「うーーん、警備は厳重だね」

美術館から少し離れた高圧電線の鉄塔。そのてっはに立つ少女がいた。

セーラー服のような衣装を身にまとい、とても際どいミニスカート。頭には大きな赤いリボンがくつついて、顔の上半分の目元辺りに仮面を着けていた。

彼女こそ、今巷を騒がしている自称美少女怪盗ベルである。

「どうやって侵入するの？」

「そうだね……。通気口があるはずだから、そこから侵入だね」

怪盗ベルは何者かと作戦会議をしている。

だが、この場には怪盗ベルの姿しか見受けれない。携帯や無線機を

使っている様子もない。

「ひやー！」

もぞもぞと、怪盗ベルの胸元がうごめき始めた。

怪盗ベルは艶めかしい声を上げ、頬を染める。

ぴょこんと小動物が顔を出した。

「ちょっとモガ！ 暴れるからブラ取れちゃつたじゃない！」

「フン、ないのにブラなんかつけるからだ

「な、なにを～～～！」

ベルの怒りをよそに、そのモガと呼ばれた小動物は、せかせかとベルの頭の上によじ登つた。

「ほりほり、もつすぐ予告状の時間だ。急いだ急いだ」

バシバシとモガは頭を叩く。

「糞モモンガが、分かつてるよー！」

「糞とはなんだ！ 僕はただのモモンガじゃないんだからなー！」

「あ～～～！ うるさいよもう！」

「うるさいとはなんだ！ 大体君が うわあー！」

いきなりベルが鉄塔から飛び降りた。頭に乗つかっていたモガも宙に放り出される。

その瞬間、ベルの背中に青白い光を帯びた羽が生えた。ファンタジーに出てくる妖精のような翼だ。その羽を広げ、暗闇の空を滑空する。

「ビックリしたじゃないか！」

モガはベルに並び、膜を広げて滑空していた。  
そして、ベルの頭に着地して髪にしがみついた。

「胸がないとか言つからだ！」

「事實を言つたままでじやないか」

「違う！胸がないんじやない！控えめで目立たないだけだ！」

「それをおいって言うんだ！」

そんな不毛な言い争いをしていると、突然下から強烈な光が照りさ  
れた。

「怪盗ベルだ！」

「空を飛んでる！」

「『鈴蘭』の周囲を固めろ！」

どうやら、警察に見つかってしまったようだ。

あんなに大声で言い争っていたら当たり前である。

「どうすんのさ？見つかっちゃったよ？」

「フフツ、大丈夫」

ベルは不適な笑みを浮かべた。なんだか少し楽しそうである。

ベルはそのまま空を滑空し、美術館の屋上に着地する。同時に、背  
中の羽は光の粒となつて消え去つた。

サーチライトが一斉にベルに向けられる。

「怪盗ベル！貴様は完全に包囲された。JUJの警備は万全である…

直ちに投降せよ」

「いやいや、警察の監さん。お勤めじへり一様です」

ベルは、下の警官達に向かつて可愛らしく敬礼した。  
マスコミのカメラのフラッシュがバシバシと焚かれる。  
このときの眞が、明日の新聞一面に大きく貼り出されることになる。

「怪盗ベル！お前は完全に包囲された！大人しく投降しろ！」

長く使われたのであるうくだびれたスーツを着込み、同じくくだびれた縁のある帽子を被つた中年男性が、拡声器を使って叫んだ。ベルはその男性に目をやると、まるで知り合いに出会ったように手を挙げた。

「やあやあやあ、誰かと思えば警視庁の銭村刑事じゃないか。お子さんとは仲良くしてるかね？」

「つむさいー最近『パパ、臭い』って言つて近付いてくれないよー...『まだ小四でしょ？かわいそー』

「そうだ。可愛い盛りの娘は近付いてくれないんだ...」

「いや、娘さんが可哀想。父親が臭いなんて」

「.....」

銭村刑事の持つ拡声器からメキメキと悲鳴が上がり始めた。

「投降せよーさもなくば発砲する！猶予はない！」

「銭村刑事、それはやりすぎです」

「つむさいー娘をたぶらかした罪は万死に値する！最近、『ベルちゃん可哀しいー』。眞奈、大きくなつたら怪盗になるー』なんて言い出したんだよー！」

隣にいる部下の警官に、銭村刑事は拡声器で怒鳴りつけた。

「！」お前を捕まえて、娘に『パパ、カッコイイ』って言つても  
らつんだ！」

銭村刑事は、持つていた拡声器を部下に無理やり押しつけると、ホルスターから銃を抜いてベルに向けた。

周囲の警官は、銭村刑事の行動に動搖していたが、銃を向けられたベルは冷静だつた。

ニヤリと口端を上げる。

チャンス！

ベルはかかとを一回鳴らした。

途端、ブーツから白煙が舞い上がり、ベルの姿を覆い隠すだけなく、周辺の視界を奪つた。

「クソ、煙幕か！」

突然のこと、警官達は更に動搖した。

「落ち着け！大型扇風機を起動せろ」

しばらくして、大型扇風機が回りだし、その強風で煙幕を晴らした。

その時には、既にベルの姿はなかつた。

ベルはまんまと美術館への侵入を成功させていた。

銭村刑事が銃を取り出して、警官達が動搖しているところに、煙幕

を張ることによって更に動搖させる。煙幕と動搖により生まれたその隙に、正面入り口から堂々と侵入したのだ。

「いたぞ！かい あふつ  
「おいどうした かふつ」

突然、警官一人が倒れた。ただ眠っているようだ。

「いえい、ビンゴ！」

ベルはパチンと指を鳴らした。逆の手には、玩具のような銃が握られている。

「麻酔銃はあまり使わない方がいいよ  
「分かつてるって  
「ホントかなあ」

モガの心配をよそに、ベルは美術館を音もなく駆ける。  
そして角を曲がり、『鈴蘭』の展示場所に来たときだつた。

「来たな……」

ベルの前に、総勢十名の警備員が現れた。  
その奥から、木刀を持つた剣岳 芽依が歩いてくる。

「残念だが、『鈴蘭』は我々二ノ宮総合警備保障が守つている。お  
帰り願おう

「それは無理なお話。今回もキッチリ頂くよ

ベルと芽依の視線がバチバチと火花を散らす。

「53戦15勝28敗10引き分け。負け越ししているからな……。今度は勝たしていただく！」

芽依が、一気に距離を詰めてベルに切迫しようとする。

「ていつ　」

ベルは芽依に可愛らしく何かを投げつける。それはプラスチックボトルだった。

「そんなもの……！」

飛んでくるボトルを、木刀で一刀両断する。もちろん、プラスチックボトルは破裂した。

バシャン

中身の液体を芽依はもろに被つた。

そして、妙にヌルヌルする液体に足をとられ、ツルンと盛大に転げた。

「ハツハツハー！どうだ、ローションの威力は！」「な、ローションだと！」

芽依は顔を真っ赤にした。

「なんてエロエロな……！」

「フフフ、残念ながらお笑いに使うはずだったテレビ局からパチつてきた業務用ローションだ。想像しているのと違うよ」

ベルの言葉を聞いて、更に顔を真っ赤にした。怒りからもあるが、大半が羞恥からであった。

「お前たち、早く取り押さえろ！」

背後にある部下に指示を飛ばす。ヌルヌルして立ち上がる事はあらか、背後を見る事すらできな  
い。

「駄目です！」「ちりにもローションの被害が……！」

何とか悪あがきをして方向転換した芽依が見たのは、ローションに足をとられて立ち上がれない部下達の姿だった。

「さて、邪魔はなくなった」

ベルは華麗に跳躍し、ローションに捕らわれている芽依達を飛び越え、『鈴蘭』の前に着地する。

恨みがましい視線と声を受け流しながら、『鈴蘭』を取り外す。そして、丁寧に布に包むと、それを脇にはさんで持つ。

「それじゃあねえ～～」「くつ、待て怪盗ベル！」

ベルは来たときと違う方向に駆けていった。

ベルは再び美術館の屋上に現れた。

「ハツハツハ！」

ベルの笑い声が響き渡つた。

サーチライトの明かりがベルの姿を照らし出す。

「警察、二ノ宮総合警備保障の諸君！君達の負けだ」

そして、ベルは『鈴蘭』包む布を取つて掲げた。

「『鈴蘭』はこの怪盗ベルが頂いた！」

ハツハツハとベルの高笑いが響き渡つた。

「くそ……怪盗ベルめ……！」

「フツフツフ。銭村刑事。これは娘さんにお土産だ」

そういうと、ベルは銭村刑事に正方形の物体を飛ばした。  
銭村刑事はとっさにその物体を受け止めた。

「これは……」

色紙だつた。

黒いマジックで崩された文字が書かれており、可愛らしい丸文字だつた。

「サ・イ・ン。娘さんこよろじくね

語尾にハートがついているように甘つたるい口調でいい、ウインク

しながら投げキッスをよこした。

ボンと音をたてて、再び白煙が周囲を包む。

その白煙が晴れた頃には、既に怪盗ベルと『鈴蘭』の姿は消えてしまつた後だった。

「お父さん、お帰りー」

銭村刑事が帰宅すると、近頃めつきり近づいてくれなかつた愛娘が駆け寄つてきた。

その姿に思わず頬が緩む。

事後処理で朝帰りになつてしまつたが、今までの疲れが吹き飛ぶようだつた。

「ねえお父さん」

そつと、愛娘は手を差し出してきた。

「お土産」

「えつ？」

「だからお土産！」

ふくつと頬を膨らます。

「真奈、知つてるんだからー朝にテレビでやつてたもんー！」

そこにして、銭村刑事は全て理解した。

昨夜のことがテレビのニュースになつていたのだろう。そしてあのやり取りも……。

「お土産お土産～」

ポカポカと銭村刑事の胸を叩く。ついに観念したのか、銭村刑事は鞄の中をガサガサと漁ると、

「……はい」

怪盗ベルのサイン色紙を手渡した。

「わあ～～～い！ベルちゃんのサインだあ～～

クルクル回り喜びを爆発させ、そのままロビングのまゝ走り去ってしまった。

「はあ……」

なんともやるせない気分になる。

「怪盗ベルめ……。娘の心まで盗りやがって」

今度こそは

そつ自分に言い聞かせ、銭村刑事は愛娘の心を取り返し、怪盗ベルを捕まえてやると心に誓つのだつた。

『シーケレッター』 1 (前書き)

ストックが切れてしまった……。更新速度が遅くなるなあ……。

## 『シークレット』 1

春樹は朝は早く起きる方である。

何故なら、登校する前に寮のロビーで新聞を読むのを日課にしているからだ。

いつもなら、ルームメートの夏依がテレビで朝の番組を観てているが、今日はいない。

春樹より起きるのが早い夏依のだが、今日に限っては春樹が起きてもまだ眠っていたのだ。

「……うむ」

少し硬めのソファーに身を沈め、新聞を開く。

とりあえず四コマ漫画を読み、テレビ欄を確認する。特になにもなかつたので、新聞の一面を見る。

「……なんだこれは」

思わず、そう呟いてしまった。

一面には可愛らしい少女が、ワインクをして敬礼している『真がデカデカと貼り出されていた。

その上には、『怪盗ベル現る!』というタイトルがある。

記事を読んでみれば、どうやら有名な美術館に展示されていた『鈴蘭』という絵が、美少女怪盗ベルとかいう者に盗られたようだつた。それにもしても、美少女とか書かれているが恥ずかしくないのだろうか?

本人がそつと乗っているなら尚更恥ずかしいだろ?」……。

とりあえず、記事の内容に興味がわいたので読んでいくことにした。

「……ああ佐久良、おはよっ

まだ眠そうな目を擦りながら、夏依がロビーにやって来た。そのままソファーに身を沈めると、ひとつ大きな欠伸をする。

「眠そうだな。朝飯喰つたか?」

「ああ食べた。だが眠い。夜更かししてしまったからな」

「それだから身長が伸びないんだぞ」

「……何のことだ?」

春樹は知っている。

夏依が毎日こつそり牛乳をカブのみしていることを。

そして夏依が、自分の体にコンプレックスを抱いているであろうことを。

「いや、何でもない」

そう言つて春樹は誤魔化すと、再び新聞に視線をやる。

その春樹の様子を、夏依は訝しがり目で見ていたが、テレビのリモコンを取り電源を入れて、朝の番組を観だした。

『 昨夜、クロード・ロネの作品『鈴蘭』が、怪盗

ピッ

『怪盗ベルは、これまでにも

ピッ

『現在、現場となつた美術館は

』

「ピッ

『報道特別ばん』

ピッ

夏依は一通りのチャンネルをろくに観ずに回していくと、テレビの電源をきつてリモコンを机に放り投げた。

「なんだ、観ないのか？」

「同じ内容ばっかりみたいだしな……。それに、個人的に観たくない

「怪盗ベルがビートかっていうニュースか？」

春樹の言葉に、夏依はピクンを体を震わした。

「というか、この怪盗ベルって何なんだ？」

「……佐久良、知らないのか？」

夏依は、軽く驚きの表情を浮かべていた。

「最近再び現れた怪盗だ。警備をあざ笑うように静かにすり抜けたり、時にはじり押しの中央突破。警察に予告状を送りつけるほど大膽不敵で、さらに神出鬼没で正体不明だそうだ」

今度は春樹が驚く番だった。

「詳しいな

「はや！ や、別にそんな事ないぞ！」

「……なぜ涙田？」

必死に否定する夏依は、なぜか涙田であった。

「なんだ、ファンなのか？隠すことでもなかろう」「あ、いや……そういうことにしてくれ」

夏依はホッとした様子で息を吐いたが、その表情は複雑そうだった。そんな夏依を不審に思いながらも、春樹は再び新聞に視線を戻した。

「……しかし、恥ずかしくないんだろうかな？」

「ハ？ なにがだ」

「これだよ」

そう言つて春樹は新聞のある部分を見せた。

指が指しているのは怪盗ベルの姿を映した写真だった。

「これがどうかしたか？」

「いやあ、ただでさえスカートがギリギリなのに、こんな高いところに立つていたら……なあ？」

「なあと言われても分からない」

「つむ……」

春樹は困ったような表情をして頭を搔いた。

そして、言い出しへくそつに切り出した。

「ただ……警察の位置とかなら、下からスカートの中が丸見えだつただろうなあと思ってな」

「なつ……！」

夏依の顔が真っ赤に染まつた。よほびうづなのだらう。首まで真っ赤になつていた。

「ななな、何かと思えばお前、そそそ、そんな事を考えてたのか…」「いや、そうふと思つただけで、別に」「ウルサイ！ムツシリスケベ…！」

夏依はそう怒鳴ると、そのまま鞄をもつて、いつも速い歩調で先に楠木寮を出て行つてしまつた。

置いて行かれた春樹は、久しづりに一人寂しく登校をしていた。といつても、楠木寮から学校まで徒歩三分。距離はとても短い。ちなみに、通学路は名前も知らない木々達の並木道だ。この前は鹿が出た。

「……その内、熊でも出るんじゃないかな」

熊除けに鈴でも付けようかと真面目に考えていると、気が付けば校門の近くまで来ていた。

門柱の横に立つ少女が確認できる。

今日もあのコントに付き合わないといけないのかと思うと、清々しい朝の気分も一気に憂鬱になつた。

「あ～～、会長、おはようございます」

「……退学届け」

「出します」

「やつ……」

……あれ？

いつもならここで歯みついてくるはずの薫が全くその様子を見せない。

全くと言つていいほど元気がない。

そう言えば、今日は『三本尻尾』が一本しかない。それが関係しているのだろうか？

「なあ会長。剣岳先輩はどうしたんだ」

「……休み。というより山籠もり中」

「ハ？ 山籠もり？ 修行でもしてるのか？」

「その通りよ」

薫は苦々しい表情でそう応えた。

何かよっぽどことがあったのだろうと春樹は勝手に推測した。

「……新聞かニュースは見た？」

「ん？ 見たぞ」

「なら、昨日あつた事は知つているでしょ」

春樹はん？ という表情をした。そして、あることを思い出した。

「ああ、怪盗ベルとかいう奴か」

「それが原因。美術館の警備していた会社知つてる？」

「いや、知らない」

「なら、教えてあげる。その時の警備会社は『二ノ富総合警備保障

』」

「……二ノ富」

どこかで聞いたことがあった。

二ノ富とこつのは名字は珍しいものでない。ただ、知り合いにいた

ような気がした。

「……あー。」

思い出した。  
目の前の少女を見て。  
灯台下暗しだった。

「まさか……」

「そのままかよ。一ノ宮総合警備保障は私の父親の会社。そして、  
剣岳 芽依はその会社でトップエースの警備員」

「なんてご都合主義……」

「なんか言つた」

ギロリと薫は春樹は睨みつけた。

見かけ以上の凄みに、春樹はただ首を横に振らざるおえなかつた。

「まあいいわ」

そんな春樹の様子を見て、呆れたよつてため息をついた。

「芽依は昨日の警備主任だったのよ」

「へえ、そうだったのか」

「それで結果は分かつてるでしょ」

「……盗られたって訳か」

はつはあ～～ん。読めてきた。

絵を盗られたことが自分の力量不足と思った先輩が、修行のために  
山籠もりを始めたということだな。

「詳しく述べてくれたけど、『私は汚された……』って言つていたわ。よっぽど悔しいのね」

「プライドが汚されたのか……」

「あの娘、自分を追い込みやすいから……」

薫は心配そうに遠くを見つめた。

実際は、ローションを被つただけなのだが、芽依には堪えきれなかつたらしい。

「ところで、今日は成瀬君は先に行つたけど……何したの」

「やひかしたのを前提か……」

「当たり前じやない。あんなに変な成瀬君、見たことないわ」

「一体どう変だつたのだろうか？」

春樹には思い当たる節がなかつた。

確かに、なぜか夏依を怒らしてしまつた。ただ、少し疑問に思つたことを口にしただけだ。それが結果的に夏依の怒りの琴線に触れてしまつた。

もしかして、これはやらかしたのだろうか。あの疑問を口にしてしまつたことがやらしたことなのだろうか。もしかして。

これが口は災いの元ということか。

そういう判断に至つた春樹は、

「昨日夜更かししていたみたいだからな。寝不足で機嫌が悪いんじやないか？」

誤魔化すことにした。

「夏依、低血圧気味みたいだしな。本人も気にしてよく牛乳飲んでいるだろ？」

「低血圧に牛乳は関係あるのかしら……？」

「あるー。」

春樹は断言した。だけど、その後に小声で『さうと』と付け加えていたけど。

「……いいわ。もうすぐチャイムが鳴るわ。早く行きなさい」

「お、やっぱり今日の会長は大人しいな。つにに諦めてくれたか」

春樹の言葉に、薰はフンと鼻で笑つた。

「まさか。貴方には退学してもいいわよ。近いしつこはずね……」

「……一体その自信はどうから出てくるのやう」

自信に満ち溢れている薰の姿を見て、少し不安が胸の中に出てきた。一体どうするつもりだろ？

春樹は色々考えてみるが、学力も素行も問題ない自分をいかに退学に追いやるか見当が付かない。

冤罪や陥れることも考えられるが、あの先輩が仕掛けてくると思えない。

『ムカつくけど、真っ直ぐで正義感のある何だかんだいい人』

それが春樹の薰に対する認識だった。

「ま、楽しみにしてるよ」

そう薰に言い残し、春樹はいつもより重い足取りで、教室に向かつたのだった。

## 『シーケレット』 2

時間は少しさかのぼる。

辺りは真っ暗闇で、そろそろ新聞屋さんが各家庭に新聞を投函しにいこうとする時間。

成瀬 夏依は疲れた顔をして楠木寮に帰ってきた。

「はあ……」

夏依から自然とため息が出た。

「なんでこんなことしなきゃいけないんだ……」

夏依は頭の上に乗るモモンガを指でつづいた。するとそのモモンガは夏依の頭を叩き始めた。

「君は一族の自覚があるのかい！？ 誇りある怪盗一族の！」

「……盗つ人に誇りなんてあるのかなあ」

「なにを言つ！ 盗つ人と一緒にするんじゃない！ ちゃんと一般人を守るために活動しているんだ！」

「と言われてもな……」

ぶつちやけ、その理由があまりにぶつ飛んでおり、信じじるに値しないものだった。

「美術品に溜まつた”スペル”を放出する……ね

説明はこうだった。

スペルとは、人間が感じた感情のことと、人が美術品を見て何か感

じることで、美術品にスペルが溜まり、蓄積されていく。

蓄積されてたスペルは、美術品の許容量を超えると溢れ出し、人間に悪影響をある……らしい。」のモモンガが言つことは。

そのため、我が一族は美術品を回収してスペルを解放するために、代々怪盗を喰んでいるそつた。

無論、夏依も例外でなく、恥ずかしながらも『怪盗ベル』となつたのだった。

「母様もいきなりだ。『私、明日から出掛けるから、かわりに怪盗になつてね』なんていうんだから。兄様に言つてよ」

「仕方ないよ。怪盗は代々”女”である」とつて決められてるんだから

そう、なにを隠そう成瀬 夏依は、正真正銘生物学上立派な”女”である。である。

胸だつて微かに膨らんでいるし、行為さえすればしつかり子供だつて出来る。無論、したことはないのだが。

「女……ね。じゃあなんで僕はこの学校に”男子生徒”として登録されてるんだろうね！男子生徒として…」

大事だから一度言いました。

「しかたがないよ。もし怪盗ベルの素顔を見られた時の保険のようなものだし。怪盗ベルが男の訳ないからね」

「僕、女ですけど！身体検査とかされたら一発でしょ…」

「……そこは気合いでなんとか

「なるか！」

まったくもつて、なにを考えているのだろうかあの親は！

既に決まっていた地元の高校を無断で断り、しかもこの高校に忍び込んで関係書類一式とデータを捏造。結果、試験もせずに裏口入学という形で入学させられた。

何故だか男子生徒という形で。

始めは直ぐにバレるだろうと思つていた。

バレたら元に戻ればいいだけの話だ。

夏依はそう高をくくつて楽観した。

だが、入学して3ヶ月位の今まで立つても、ルームメートにすら気づかれていない。

夏依の技術が高いのか、それとも女としての魅力が皆無なのか……。どちらにせよ、夏依にとつては悲しい現実だった。

「ほら、明日も学校だろ。早く寝なよ。オイラはこれからだけどね」

「あ、モガつて夜行性か」

「そうだよ、これから食事さ！いやつほー！」

夏依の頭から飛び降り、近くの木に登つていった。

きつと、そこから飛んで移動するだろう。

モガの姿が見えなくなると、夏依は可愛らしい欠伸をして、楠木寮の中に入つていった。

昨日、いや厳密には今日なのだが、いつもより寝るのが遅かつたからであろうつ、夏依は見事に寝過ごしてしまった。

いつもならまだ眠っているはずのルームメートの姿もなく、一人いる部屋は何故か無性に寂しさを感じた。

「……起こしてくれてもいいじゃないか」

朝は低血圧で寝ぼけ氣味の夏依は、空になつてこむベットを眺め、ぽつりと呟いた。

そして、暫くするとモヤモヤした頭の中がすつきりし、無意識のうちに呟いた言葉が無性に恥ずかしくなつた。

「……着替えよ

頬に赤みがさしたまま、のろのろと着替え出す。

ああ、なんであんな事を言つたんだろ。寝ぼけていたからつてあんまりだ。別に置いて行かれて寂しかつたわけでない。でも、出来れば起こして欲しかつた。

「……！つて違つー」

ブンブンと頭を振る。

そうじやない、そうじやないだろ。

ルームメートでクラスメートなんだし、たまには気を利かしてくれてもいいじゃないかつて言つ意味で、別に他意はない。あくまでルームメートとしてだ。

そう自分に言い聞かせ、夏依は寝間着の上を脱いだ。胸に巻き付けているサラシが露わになる。ふと、姿見に映る自分を見た。

「……

平面だ。フラットだ。

女ならあるべき立体がない。

サラシをしているから当たり前か。

そういえば、入学前に母様が……

あら、夏依ちゃんサラシ？意味ないわよ。

そんなことない。そんなはずはない。

ちゃんと膨らみはある。……微かだけど。

まだ成長するはずだし、そのために毎日牛乳だつて飲んでいる。

きっとそのうち大きくなるはずだ。

いや、大きくなると流石にバレるか。

となると、ルームメートにもバレるということ、も、もしかしたら情欲を持て余して襲いかかってくるかもしね。

夏依は頭の中で想像してしまい、再び赤面した。

ダメだ。それはダメだ。なんとしても隠し通さなければ。

と、とにかく着替えよう。もしかしたら、起っこしこくるかもしねない。

夏依はワタワタと着替え出した。

夏依が食事をとり、ロビーに行くと、春樹がソファーに座つて新聞を読んでいた。

軽く挨拶をして、夏依もソファーに身を沈めた。

ソファーのクッションは柔らかく、まだ眠気があつた夏依は欠伸をしてしまつ。

「眠そうだな。朝飯喰つたか？」  
「ああ食べた。だが眠い。夜更かししてしまつたからな」

あんな恥ずかしい格好して、『怪盗ベル』とか名乗つて……なにやつてるんだろ。

夏依は、昨日の自分を思い出す。

「それだから身長が伸びないんだ」

「……何のことだ？」

身長なら女子平均のちょっと小さいくらいだが。

春樹はバツが悪そうに視線を新聞に戻していった。

訝しむようにしばらく春樹を見るが、とりあえず気にしないことにしてテレビを付けた。

「……」

どのチャンネルも、昨日の怪盗ベルの報道ばかりだった。あんな自分の姿、見たくない。

「なんだ、観ないのか」

「同じ内容ばっかりみたいだしな……。それに個人的に観たくない」

「怪盗ベルがどうとかっていうコースか？」

春樹の言葉に、体が勝手にピクンと反応してしまった。落ち着け、落ち着け……。

「というか、この怪盗ベルって何なんだ？」

「佐久良、知らないのか？」

まさか、知らないとは思わなかつた。

結構マスコミにも取り上げられているし、熱狂的ファンの人もいる。ほとんどの人が知っているのに、このルームメートが知らなかつたのが驚きだつた。

夏依はとりあえず、噛み砕いて説明した。

といつても、テレビで言つていたことだけ。

すると、春樹は驚いたように目を少し見開いた。

「詳しいな」

……しまった。喋りすぎたか。

頭の中がじゅぢゅになりワタワタとパニック状況に陥った。

「はやー やや、別に詳しくないぞ」

「……何故涙目?」

ああ、しっかりするんだ!

怪盗ベルの話題なんかで動搖するんじゃない。  
正体がバレるつていう訳じゃないんだ。いや、もしかしたらつてこ  
ともあるし……。今思えば、マスク!!!にも取り上げられていない事  
を言つたかもしれない。

夏依の中で不安がドンドンと膨れ上がりてきて、胸が爆発しそうな  
くらいだった。

ああ、バレても佐久良なら理由を話せば分かってくれるかもしね  
い。だけど、そうなると女だつてこともバレる訳で……もしかした  
ら、今までの関係が崩れてしまつかもしれない。それはいやだ。だ  
けど、一人だけの秘密……ああ、なんて甘美な響き。

……つて、何を考えてるんだ!? そうじゃないだろ、そうじゃない  
だろ成瀬 夏依! しっかりするんだ成瀬 夏依!

…… よし、もう大丈夫。ああひとつでもいい。

「なんだ、ファンなのか?隠すことでもないだろ?」

「あ、いや……そういうことにしてくれ」

一気に脱力感が支配した。

さつき悶々と考えていたのは何だつたんだろう。  
とにかく、バレるようなことがなくつて助かった。

……まあ、少し残念でもあるけれど。

「しかし、恥ずかしくないんだろうかな？」

「ハ？ なにがだ？」

「これだよ……」

そういうつて春樹が出してきたのは怪盗ベルの記事だった。自分の写真が掲載されるのは、やはりというか恥ずかしい。だが、別に可笑しい所はないはずだ。

「これがどうかしたか？」

「いやあ、ただでさえスカートがギリギリなのに、こんな高いうところに立つていたら…… なあ？」

「なあと言われても分からない」

一体なにが言いたいんだ。

春樹は言いにくいのか、少しばかり唸つて、そして口を開いた。

「ただ…… 警察の位置とかなら、下からスカート中が丸見えだっただろうなあと思つてな」

「なつ……！」

夏依は春樹の言葉に絶句した。

それと同時に羞恥心が湧き上がる。

そういうえば、鼻の下がのびていた警官がいたような気がする。もしかしたら、見られていたのかもしね。

不幸中の幸いなのが公共電波にのらなかつたことだらう。

「ななな、何かと思えばお前、そそそ、そんな事を考えてたのか！」

「いや、そうふと思つただけで、別に」

「ウルサイ！ムツシリスケベ！！」

顔を真っ赤に染め、夏依は自分のカバンを持って早足でロビーを去つていく。

後ろで春樹が何か言つていたが足を止めない。

怒つているわけではない。ただ、恥ずかしいだけだ。

恥ずかしすぎて、この場にいることができなかつた。

楠木寮を飛び出すように出た夏依は、一人で学校に向かつことになつた。

寝坊した割には、いつもより早くに出たので、まだちらほらと人がいるだけだつた。

「あら、夏依君。おはようござります」

いきなり声をかけられたので少し驚く。  
いつも朝に門柱のところに立ち、ルームメートといつも言ひ合つて  
いる生徒会長だつた。  
正直、この人は苦手だ。

「おはようござります会長」

にしても、生徒会長はいつもどのくらいに立つてゐるのだろう。

「夏依君、今日は一人ですか？」

「はい」

「その……どうかしたの？」

「いえ、別に」

言えない。恥ずかしさのあまり飛び出してきましたなんて言えない。それに、なんで飛び出したんだろう。佐久良は怪盗ベルの正体を知

らないのだから、別に恥ずかしがることじやない。むしろ、あんなリアクションをすれば、不審に思われるじやないか。なにも考えず飛び出してしまった自分が恥ずかしい。

思わず「つむじ」してしまった夏依を、薰はキヨトンとした目で見ていた。

「えつと……なにがあつたら私に言つてね。なんとかしてあげるから」

「はい……」

夏依は軽くつむじを、つむじたまま学校の中に入つていく。途中、足をもつれさせて転んだ。

「夏依君、どうしたのかしりっ。」

夏依のおかしな様子に、薰は頭を傾げるばかりだった。

## 『シークレット』 3

春樹は、肩をいりつかせながら廊下を歩いていた。

表情は無表情なのが、近寄りがたいオーラを放っていた。そのオーラのため、春樹の前にいる生徒達は自ら道を空け、モーゼが海を割つたようになっていた。

無論、春樹は好きで不機嫌になつてゐる訳でない。

その原因是、背後を付きまとつてくる奏と様子がおかしい夏依、そして急に話し掛けてくるようになったクラスの女子と視線のみ投げかけてくるクラスの男子だった。

朝、学校に来てみれば、笑顔で奏が話しかけてき、なにかある事に迷惑なぐらい付きまとつてくる。

もう追い払つたり逃げたりするのを諦めて、ボンヤリと外でも眺めていたら、今度は視線を感じた。その方向を見てみると、夏依がこつちを見ていて、すぐに視線を逸らされた。また視線を感じて向くと逸らされて、それが何回も続いた。

そんな事にウンザリしていると、今まで話し掛けてこなかったクラスの女子がやつて来て、根掘り葉掘り色々な事を質問してきた。その様子を、羨ましそうに、そして恨めしそうに眺めてくる男子生徒達。

もう、勘弁して欲しかつた。

「失礼しまーす！」

苛つきつつ入つた部屋は生徒会室。生徒会役員が集う部屋である。何故、春樹がこの場所に来たかというと、校内放送で生徒会長殿に呼ばれたからである。

ほんとなら無視してしまははずだつたのだが、結局律儀に来てしまつたのだ。

「ノックぐらいしない。マナーよ？」

部屋には、生徒会長一ノ宮 薫が椅子に座つて足を組んでいた。座つている椅子は高級そうな皮の椅子とかではなくて、ただの事務用の椅子だった。

「とにかく、好きなところに座つて」

春樹は近くのパイプ椅子に腰を下ろした。

「……で、放送で呼び出して何なんだ。まさか、闇討ちか？」

「そんな訳ないでしょ。ただの頼み事よ」

「頼み事？」

予想していなかつた事で驚かされた。

薰には、毎日と言つていいくらい化け物扱いされているし、見事なまでに嫌われていると思つていたから尚更だ。

「意外だな。俺に頼み事なんて……。何を企んでいる  
「別に何も企んでいないわよ。私の知りうる人間の中で、あなたが適切だと判断しただけ。……嫌だつたけど」

嫌なら呼ばないでくれ、とは言えなかつた。  
何故か、春樹を鋭い目つきで睨んでいたからだ。

「……芽依の様子、見てきてくれない？」

「剣岳先輩の様子？」

「そうよ。ちょっと私は用事があるし、友達とかに頼むのも悪いし。  
そうなるとあなたが思いついたって訳

第一、危なくって行けないのよ。

そう呟いたのは春樹には聞こえなかつた。

「で、返事は？」

「どうせ拒否権はないんだろ？行かせてもらひよ」

「あら、ありがとう。ちなみに、嫌つて言つたら素直に諦めるつりだつたわよ」

「……じゃあ、今からでも遅くはないな」

「残念、締切よ。遅かつたわね」

「……」

春樹はなにも言わずに生徒会室を出て行つた。  
少し肩が下がつて哀愁が漂つっていた。

「もういいわよ」

春樹が去つた生徒会室で、薰はポツリと呟いた。

「ふう、気付かれるかと思いましたが、杞憂でしたか」

部屋の端、窓際の方からひとりの人間が、もとからいたかのよう忽然と姿を現した。

セーラー服に、黒の三角帽子にマントといつ異質といつが、異様な恰好。

そんな変な姿の人間に、薰は至つて普通に話しかける。

「監察官、どうだつた？」

「ハイ、言つてた通りでした」

薰に監察官と呼ばれた人間は、スカートのポケットから携帯電話みたいな白くて小さな四角い物を取り出した。

「マジックカウンターの数値は〇でした。まあ、厳密には〇ではなくかなり小さな数値でしたが、サプライズです。人間なら いえ、生命体なら有り得ない数値です」

「やっぱりね、道理で魔力を感じないわけね」

「実際、生命維持に二ードな魔力数値より下です。彼は……化け物です」

「そうよね……」

「事前に接触もしましたが、その時はただの人間のようでした。しかし、バツクがあるようです」

監察官は手に持つマジックカウンターをしまづ。

「バツク？」

「ハイ。バツクに何かの組織がついているみたいです。護衛りしき人間がいました」

「護衛ねえ」

薰は机に肘をつき手を組む。そこに顎を置いた。

「彼に付きまとっている彼女かしら」

「だとしたらわかりやすすぎるわね、と苦笑した。

「本部にはこちちらで連絡しておきます。多分、脅威排除することに

なると思こまや

「やつ……」

監察官の言葉に、薫は一瞬表情を曇らせた。

「その時は私も協力する事になります」

「……監察官が！」

「ハイ、ではその時はよろしくお願ひします」

監察官はそう言つと、マントをひるがえし、忽然と姿を消した。

「……大変な事にならうつね」

薫は一人呟いた。

泉稜学園高校の裏には、更に山奥に続くルートがある。といつても、単なる獣道だ。

そんなところを、春樹は歩いていた。

「先輩は何故こんなところで修行なんか……」

ぱつわぱつわと邪魔な枝や草を払う。しばらく歩いていくと、ひらけた場所に出た。

「おつ……」

剣道着姿の芽依が愛用している木刀を振るつ。

「ハアツ！ハアツ！ハアツ！」

ぶんぶんと木刀が空を切る音が響く。

「剣岳先輩」

「……む、後輩か」

春樹の姿に気付いた芽依は、近くの木に掛けていたタオルを取つて汗を拭ぐ。

「どうした。こんな所に来て」

「会長に言われて様子を見に来たんだよ」

「珍しいな。後輩が薫会長の言つことを聞くなんて」

田を見開いて驚く芽依に、春樹はただ肩をすくめて見せるだけだった。

「まあいい。ちょっと付き合つてくれ

「付き合つて何に……」

ただ押し付けられたのは木刀。それが意味するのはただ一つ。

「修業に付き合え」

「せんぱーい、手加減してくださーよ」

「…………」

春樹と芽依は向き合いつ形でいる。

二人とも木刀を持ち、春樹は嫌々ながら、そして芽依は至つて真剣に田を据えている。

（おいおい、先輩本気じやないか……）

芽依の目を見た春樹は、背中に冷たい物を感じた。

「……では、いざ！」

「え って、うおっ！」

姿勢を低くした素早い動きで、春樹との距離を詰め、下段の構えから一気に木刀が振り上げれる。

対する春樹は、動物としての直感で生命の危機を感じ取り、体を後ろに反らして木刀を回避した。

その際、前髪が木刀の先に掠つた。

「ちょ 先輩、洒落になりませんよ」

春樹は抗議するが、芽依は別のことにつき目していった。

「一瞬で決めるためのスピードに乗った攻撃だつたんだが……避けられるとは思わなかつた。やるな後輩。そうでないと面白くない」

ノリノリだった。

木刀を構え、振り抜いてくる。

「くつ……よつ……とお、はあー」

春樹はただひたすら避けていた。

避けきれない時は、木刀で弾くか太刀筋をそらしている。

「どうした！避けるばかりか！」

「そう言われましてもねえ！」

芽依は、今まで振りまくっていた木刀を一度脇近くまで引き寄せた。

「はあ！」

一気に喉元目掛けて突き出す。  
かなり素早く、鋭い一撃になる。

「――！」

瞬間、ズキンと頭が痛んだ。

春樹は、体を捻ってその鋭い突きを首すれすれで回避。そのまま一回転して、芽依が握る木刀の柄付近に一撃を叩き込んだ。

芽依の手から愛用の木刀が落とされた。

「なつ！」

「ふう、何とか助かった」

春樹はホッとため息をついた。

何とか痛い目に遭わないようにしておいたけど、まさか勝つとは思つてもいなかつた。

「アクロバティックでトリックキーな動きだな」

「そうですか？」

「ああ、まるで怪盗ベルだ」

なにや、雲に行きが宿じへなつてあた。

「今まで怪盗ベルと何度もやり合つたことがあつてな。奴もかなりアクロバティックでトリッキーだつた」  
「そうですか……」

芽依は、じりじりと春樹に近付いてくる。

「私が言いたこと、分かるよな?」  
「いえ、全く検討がつきません」  
「そうか、なら教えてやる!」

そして、遂に芽依は春樹の肩を掴んだ。  
ずいっと顔を近付ける。

微妙に、芽依の大きな胸が体に当たつていたけど、春樹はそれどころじゃなかつた。

「私の修業を手伝ってくれ」  
「いや、それはちょっと」  
「手伝ってくれ」  
「俺にも事情ど二つものが」  
「手伝え!」

どうぞ」と近くなる顔に、春樹は頷くしかなかつた。

「よし、やうと決まればもう一戦だ」  
「えつ、せめて少し休ませ」  
「ござい、参る!」  
「ちよ、つわあつ!」

この日、春樹が解放されたのは、日が沈みかけて辺りが暗くなり始めた頃だった。

## 《シークレット》 4

空に浮かぶ少し欠けている月。

時折吹き抜ける風が頬をなで、髪をなびかせ心地よい。

虫の鳴き声が控えめに鳴り響き、それが初夏を感じさせた。

「……ふう」

女子寮である柏木寮の一室。

久遠 奏は、自室の窓を開けて空を外を眺めていた。

「おっ、ため息をついて外を眺める美少女！ 絵になるねえ」「もう陽菜、茶化さないでよ」

奏は丸瀬メガネのルームメートに苦笑いをした。彼女の名前は榎木<sup>エ</sup>陽菜。

オレンジ色のフレームの眼鏡が無駄に存在を示していて、チャームポイントとなっている。

「ため息の原因は、カナが気にしてる男の子かな？」

陽菜は、首を傾げながら顔を近付けてくる。

苦笑いの表情の奏の眉がピクピクとひくついた。

「んんっ？ 動搖してるね？ しちゃつてるね？」

「してなあ～い！」

頬を少し赤く染めながら、奏は近付く陽菜の顔面を掴み引き離した。

「だ、大体、私は別に春樹君の事なんか  
「私は誰も佐久良君とは言つてないけど  
「！」

「ほほお～～、やはりその様子だと既に木の字  
「

今まで陽菜の顔面を掴んでいた手の力を思いつきり強めた。  
怒りと憎しみと羞恥を加えて。

「痛い痛い！潰れる！顔が整形されるう～～！」  
「失礼ね、そこまで握力強くないよ」  
「痛いから！十分痛いから！……あ、なんか田覓めそう」

恍惚の表情を浮べ始めた陽菜に、奏はダメだこりゃとため息をついて陽菜を解放した。

「うう、何だか知らない自分の一面を見た感じ  
「それが本当の陽菜じゃないの？」  
「そつかあ、私はだつたんだ。うだと思つてたんだけどなあ

ルームメートの何ともいえない一面を見てしまい、奏は苦笑いするだけだつた。

「にしても、カナは何で佐久良君に付きまとつているのかな？」「べ、別に付きまとつてなんか  
「にひ、シンデレ  
「怒るよ  
「じめんなさい」

正直でよろしい。

「でもでも、実際力ナは佐久良君に『執心じやない』

「『執心じやありません』

「ええ～～」

露骨なまでに不満そうな顔をする陽菜に、内心奏はヒヤヒヤしていた。

こつそりと誰にもバレないように春樹について行つてたり、先回りして待ち構えて出来るだけ自然体で接したりしているから、周りからは変には思われていはないはずだ。

だが、残念ながら実際には、追跡は奏がドジを踏んだり、隠れているつもりでも丸見えという散々なもので、待ち構えているのだって自然体どころか、拳動不審で口を開けば噛み噛みの会話という不審極まりないものだった。

こんなバレバレの状況でも、本人は至つて真面目にやつており、完璧な隠密行動をしていると思っていた。

久遠 奏、転校二日目で既にかなりの有名人になつていた。本人の知らないうちに。

「じゃじゃ、なんで佐久良君に恋する乙女な目を向けてるの？」  
「なななな！ そそそんな目なんかして

「にひひ ツンデレ」

そこで、奏は陽菜にからかわれたことに気が付いた。

「ひい～なあ～！！」  
「ひにやあああ～！！」

ドタドタギッタンバツタンギヤーワーワーヒィヒィハアハア。

ひと暴れして疲れた一人はその場に倒れ込んだ。

「うう……カナの鬼畜」

「陽菜が悪いんだからね」

顔を見合はした二人は普段と吹き出して笑い出した。

一笑いしたとたゞで、ふと思い出したように陽菜が切り出した。

「そういえばさ、成瀬君の様子もおかしいよね」

「え、そうなの？」

「うん。シンシンした感じは同じなんだけど、目がちょっと気に入るんだよ」

「田？」

「田といつより瞳？ 何といつか……恋する乙女の田に見えるんだよね」

佐久良君を見るときの田が。

「 つー！」

口に飲み物を含んでいたら、確実に噴き出していく。飛び上がる勢いで体を起こした。

「ええええ！ それはないでしょー！ 男同士だしー！」

「腐女子の間じゃ人気カップリングらしけど」

「妄想と現実を一緒にしない！」

「じゃあ、成瀬君が女の子だつたら？ 問題ないけど」

「う、それは負け じゃなくて、妄想と現実を一緒にしない！ 成瀬君は確かに女顔で女の子みたいだけど男でしょー！」

「どうかな？」

にひひと無邪気に陽菜は笑う。

「もしかしたら、男装した女の子かもよ？」

「くっくしー」

夏依がしたくしゃみは浴室に響き渡った。

なんだか今日一日は本調子じゃなかつた。きっと昨日の疲れが溜まつていたのだろう。

だから、絶対に使われないだろう時間帯の深夜を見計らい、夏依はこうして楠木寮の大浴場を利用しているのだ。

こうやって大浴場を利用するるのは初めての事ではなく、何だかんだで週に一回は利用している。

部屋についているお風呂場はバスタブが少し小さく、足が伸ばせないでの、こうして疲れを取つたりリラックスしたいときはこの大浴場を利用していた。

楠木寮の生徒のほとんどが夕食前か夕食後に入浴をしている。たまに、10時ぐらいに入る生徒もいるが、日付が変わる頃には誰一人も入つてくることはない。

本当ならもう少し早い時間帯に入浴したいのだけど、この時間帯が一番安全だから仕方がなかつた。

波打つ水面をぼんやりと眺めながら、体を包む暖かさにリラックスからか自然とため息が出た。

……それにしても、全く持つて散々だ。

突然、意味不明ファンタジーな理由で怪盗とかいう時代錯誤な存在にさせられるし、変な喋るモモンガが相棒になるし、その上身を隠すためとかで男子生徒として入学させられるし……。

学校の方に実は女ですと言つてしまおうか？ そうすれば「うやつ

隠れながらお風呂に入る必要もない。

でも

「こんな信頼関係を築けただろうか……」

他ならぬルームメートである春樹との信頼関係。まだ、2ヶ月ちょっととした一緒に生活していないが、夏依は春樹を信頼していた。対する春樹も夏依を信頼していた。互いが信頼しあう関係。

もし、性別を偽らなかつたらどうだつただろう。遠慮しあつて……いや、一方的に嫌つていたかもしれない。なにも知らずに。

それは悲しいし寂しい。

なら、今女だと言つたらどうなるだろ？やはりギクシャクするだろ？？するだろ？なあ……。

となるとやはり男としてやらないといけない訳で……。

それは……何だか嫌だ。

女として、いろんなものを失いそうだ。いや、もう失っているかもしないのだけど……。色気とか。

「…………」

自然と視線が自分の体の下の方に向く。

そこには、女らしさも微塵も感じさせない程のまつ平らな胸。成長すると信じて牛乳を飲み続けても、全く成長する気配を見せない胸。くつ……、胸が大きいけれどいいと言つものでない。もっと違う色氣がある。

その色氣を磨き、そして女として……。

そこで、夏依はハツとした。

いやいや、ちょっと待て！ちょっと待つんだ成瀬 夏依！冷静

になるんだ！

今は男だ。本当は女だけど今は男なんだ！男が色氣を磨いてじりする！バレる可能性が高くなるだけではないか！いやしかし、それはそれで女としての沾濡があ……！悶々とする夏依は手足をばたつかせる。

バシャバシャとお湯が跳ねた。

「ああもう、僕がどうしてこんな思いを……！それもこれも全部佐久良のせいだ」

お風呂からあがりつと上体を起こした時だった。

カラカラ

大浴場のスライド式のドアが勝手に開かれた。自動ドアな訳がない。誰かが入ってきたのだ。

「ん？ 夏依じやないか」

「ささささ佐久良あ？！」

ルームメートの春樹だった。腰にはタオルを巻いて大事な場所は隠れているが、無論裸だ。

「なななんでお前がこんな時間に！？」

「いや、それは俺も言いたい台詞だが……」

「お前、寝てただろ！」

夏依は春樹が寝入ったのを確認してコッチに来ていた。確かに春樹は眠っていたはずだった。

「いやまあ、そりなんだけどさ。ちゅうと、夢見が悪くて起きちゃつて……体は汗でべトベトだつたし、このまま寝るのも気持ち悪かつたし、風呂に入らうと思つてな」

「なななな

そんなの予測出来るわけがない。予測しうるところのが無理と叫つものだ。

「それにしても、あれだな。夏依お前……」

春樹の視線は、夏依の体に行つていた。  
そこで夏依は気が付いてしまつた。  
自分が裸といふことに。

そして、その自身の裸体の上半身部分を完全に晒してしまつてゐることに。

( ッー！バーンー )

奇跡的に下半身は乳白色の湯の中に隠れていたけど、上半身の……特に胸は隠していなかつた。  
とつさに隠そうとしようとしても、体が動かない。  
もうダメだ。理由を話せば分かってくれるだろうけど、関係は壊れてしまつ。  
まもなく訪れるであらう絶望を覚悟して田を瞑つた。  
夏依の体が震え、田尻に涙が浮かんでいた。

そして、春樹は口を開き、審判が下つた。

「お前、筋肉ないし痩せつぽちだな」

「…………へ？」

キヨツトーンと完全に予想外な言葉をかけられて、田が点になつた。

「ちゃんど」飯喰えよ

春樹は何事もなかつたようにシャワーを浴び始めた。

「え？ えつ？ ええええ～～～～～～」

「……どうかしたか？」

「いや、なんでもない。なんでもないんだ」

「ん、そうか」

一度夏依の方に向けた顔を、シャワーの方に戻した。  
これは、チャンスではないか。バレていない。

「……あがる」

「おひ、そつか」

夏依は下半身だけ隠して、大浴場から出て脱衣場に行く。  
ホツとしてため息が出た。

ただ、何故バレなかつたのか気になつた。完全に、胸は晒されいた。

もしかして、湯氣で見えなかつた？

夏依は自分の体を改めて見てみた。

女性特有の膨らみのない胸。

まさか、信じたくない事実なのだが……胸を見て女だと気付かなかつたのか？

男と思い込んでいるのも気付かなかつた要因かもしれない。湯氣もあつたし。

でも、湯氣はあつたけど姿を隠すようなものじゃないし、確実に胸

を見られた。

ということは、やっぱり胸を見た上で男と判断した……？

「…………そんな」

夏依は、脱衣場で膝から崩れ落ちた。  
女として、色々と失った気がした。

## 『シークレット』 4（後書き）

いつも、月見岳です。

今回で第2話シーキレット！は終了です。  
色々と登場人物の秘密な感じのする話のつもりでしたが、なんだか中途半端な感じがします。

成瀬夏依君が中心な話でした。実は、主人公より好きな人物です。次回のお話で、一気にストーリーを開拓できればと思っています。実は、まだストーリー内では2日しかたつていませんよね……。

更新速度が遅いのはご了承ください。

1投稿のボリュームというか読みこたえとかストーリーのためです。そんなのいいから早く更新しろという方はすみません。無理です。色々と感想をいただければ幸いです。

読みやすさのため、あとがきは各話ごとの区切りにしか極力書きません。ウザいと思いますので。お知らせはまえがきに書くつもりです。

後、最近mixiを始めてみました。興味のある方はお探し下さい。月見岳です。

## プロローグ 『ある昼下がり』

昼下がり。

季節柄、ポカポカとして気持ちのよいこの時間。

腰を曲げた老人達が集うその場所は、周りとは時間のスピードが違うようで、のんびりと時間が過ぎていた。

ただ、その老人達の集まりに、年端のいかない幼い女の子が一人混ざっていた。

「このお茶、なかなかいいの。いつもより美味しいと思うの」

「おや、分かるのかい?いつもと違つて、ひとつ上のお茶なんだよ」「違いの分かる、女なの」

金髪碧眼の女の子は、クイッと湯呑みを傾けた。

ホッと息をつく。

「外人さんなのに、日本茶の違いが判るのは偉いねえ」

「生まれは知らないけど育ちは生糞の江戸っ子なの。べらぼーめーなの」

横にある羊羹の一切れを摘む。

「やつぱり、茶菓子は霧洲堂の栗羊羹に限るの」

目の前で繰り広げられるゲートボールの戦いは、もうすぐ南口霧瀬商店街の勝利で終わりそうだ。

これが終わったら、北口霧瀬商店街のチームに入つてやらせてもらおう。

自前のマイステックを取りだそうと、足の届かない椅子から飛び降りた時だった。

突然、間の抜けた音楽が流れ始めた。

「電話なの」

「おやおや、笑点かい」

「なかなかいい着メロなの」

スカートのポケットをゴソゴソ探り、小さな携帯電話を取り出す。

「はいなの………… そうなの、見つかったの。………… 分かったの、私が行くの。………… 止めたつて無駄なの」

パチンと携帯電話を折りたたんで、スカートのポケットにしまった。

「急用が入ったの。今日はこれで帰るの」

そう言いつと、身長にしては大きいゲートボールステックのケースを担いだ。

「そう、残念だねえ」

「おや、ナインちゃん帰るのかい」

「急用が入ったの」

「そうかい。せっかく次はこっちのチームに入つてもうひとつもりだつたが……」

「今度来た時に必ずなの」

ナインは、ゲートボールをやっているおじいさんおばあさん達に手を振つて、広場からトコトコで出て行つた。

今日も今日とて同じような日々。  
朝は三本尻尾の連中に絡まれて、授業は見かけによらず真面目に取り組み、昼は仲良い男三人で過ごした。  
この二ヶ月ほど過ごした学校生活と何ら変わりない。  
しかし、最近少し変化が訪れた。

久遠 奏という少女の出現。

常に春樹の周りをうろつくちょっとしたストーカー。  
今のところは危険度は低いしほつているが、何故か拳銃所持の物騒な人間であることは変わりない。

「やだなあ……変なことに巻き込まれるのは」  
「ん？ 何のことだ」  
「いや、何でもない」

春樹は、夏依とたわいもない会話をしながら、ちらりと後ろをみる。ちょうど、奏が茂みに隠れようとして、見事な転倒をみせていた。  
「もー！ 何でこんなにバナナの皮があ！」  
そんな声が聞こえる。

「何がしたいんだろうな」  
「だから何がだ。さつきからブツブツと」  
「すまん、独り言だ」  
「それなら心の中でしてくれ。正直、少し気味が悪い

そこまで言われますか。

「ま、まあ、悩み事とかあるんだつたら聞いてやらん」ともないが  
「……田下、自分が何者かというのと、やたら付けてくる女の事が  
悩みだな」

なんだか可哀想な目で見られた。

「プレイボーイみたいな悩みだな  
「はつ、どこがだよ」

また可哀想な目で見られた。

「知らないのか。最近、女子連中から佐久良の好感度がグングン上  
がっているんだぞ」

「そりなのかな？」

全くそんな感じではないのだけれど。

実際、クラス内での扱いとか立ち位置は変わっていない。

「三谷がそう言つていた」

「弘樹か……。また適当な事を」

よし、とりあえず明日の昼飯を奢らせよつ。無論、一番高い定食を。  
ああ、夏依の分も一緒に奢らせるか。

春樹が明日の弘樹に対する制裁措置を考えていると、制服の袖をク  
イッと引っ張られた。

「佐久良、あれを見る」

「ん？あれ？」

夏依が指差す方向には、校門の門柱の横に立っている三本尻尾と、

小さい子供がいた。  
どうやら揉めている様子だった。

「さつさと通すの。それが最良の選択なの  
「駄目です。関係者以外立ち入り禁止です」  
「関係者なの。だからさつさと通すの」  
「だから、それを証明する物はないですか？」  
「そんな物持つてるわけないの。そんな細かいこと気にするから成長しないの」

「誰も”胸”とは言つてないの  
「！胸は関係ないわよ！」

少女はヤレヤレと言いたそうと、ふるふると首を振った。

その生意気さに、薫は怒りを爆発させそうで、握った拳は細かく震えていた。

そんな薫の横で、芽依がなだめている。  
勝者のおごりだった。

「まつ、私と違つて成長は見込まれないの。後は誰かに揉んでもらうの」

「……このガキいい！..」

「か、会長！殿中でござるのう！」

端から見るには面白い見世物になつていて、物凄く関わりたくない。

「……寮に戻る時間、もう少しズラすか  
「……」  
「どうした？」  
「いや、何でもない」

返事がない夏依の方を見たら、自分の胸に手を当てていた。  
何か思うところでもあつたのだろうか。

「いつか成長するのよ！毎日特濃の牛乳だって飲んでるんだから！」  
「それは残念なの。牛乳を飲んでも胸はおつきはならないの。太  
るのがオチなの」

「…………！」

聞こえてしまつたその言葉は夏依にとつて驚愕でしかなかつた。  
自然と手の力が抜けていき、持つっていたカバンが落ちた。

「まさか……今までの努力は全て無駄だつたというのか…………！」

事情はよく分からないが、とても悔しそうだつた。

「佐久良！」  
「うおう、なんだ！」  
「牛乳は関係ないのか！」  
「は、はあ！？」

妙に迫力のある剣幕で夏依は春樹に迫る。

「そ、その……牛乳は成長に関係ないのか！？」

胸に、とは口が裂けても言えなかつた。

「まあ、カルシウムで骨は強くなるが、成長には関係ないだろうな。  
ああ、カルシウムはビタミンセロとならないと意味ないからな」

「…………っ！」

あまりの驚愕に言葉もでない。

夏依の中で何かが崩れていくよつだった。

「……夏依？」

「……何でもない」

「いや、何でもなくないだろ」

「本当に何でもない。しばらくはつとこしてくれ」

落ちているカバンを拾い上げ、夏依はクルリと方向転換して、校舎の方に肩をがつくり落として行った。

途中、隠れている奏を一別し、

「……はあ」

ため息をついて校舎に入つていった。

一体何だと言うのだ。

「あの、春樹君？ 成瀬君は何で私を見て溜め息を……？」

「さあな。ところで隠れてなくていいのか？」

「……何を言つてるんです春樹君。私、隠れてなんかいませんよ」

今来たところです。

しつとそんな事を嘘を平然と言つていた。

教室からついてきているのは分かりきつているのだけれど。

「どうでどうしたんですか？ 帰つていたんじゃないですか？」

「やまあ、そんなんだがなあ……」

チョイイチョイと、未だに揉めている集団に指を指した。

その先を見た奏は、納得したようだった。

「巻き込まれそうで嫌だと」

「そういう事だ」

「だったら時間をズラせばいいじゃないですか？」

「そう思つたんだがなあ……」

何だろう。このビシバシと感じる嫌な予感は、奏が話し掛けて来て

から一層強くなつた。

とにかく、この場から離れた方がいいだろう。  
もう遅い気もするが。

「……あれ、もしかして揉めてる娘つて」

やはり遅かつたようだ。

春樹は小さく溜め息をついた。

「……知り合いか？」

「ええ、まあ知り合いです」

奏は校門に歩いていく。

「ん～、やっぱりナインちゃんだ」

その声に反応したのは薰と口論していた少女だつた。

奏の方に顔を向け、人物を特定すると　姿が消えた。

そして、コンマ数秒で鳴り響いた打撃音。

スコーン！

少女がいつの間にか持っていたゲートボールステイックが、奏の頭に振り抜かれていた。

そして奏は地面とキスをした。

「まったく、世話焼かすななの。」いつかはちょっとした騒ぎだった

卷之三

スコーン！

「ごめんなさいじゃないの。礼儀がなってないの」「す、スミマセンデシタ」

スコーン！

「な、なんでえ……？！」

何なんだ。この漫才は。全くもつて周りを置いてけぼりにしている。

「コラー！部外者が勝手に入るなあ！」

薰がそのツインテールを揺らして走つてくる。

「何度も言つて、部外者じゃないの。ちゃんと知り合いがいるの」

ナインと呼ばれた少女は、未だに地面に転がる奏を蹴った。  
奏は力エルが潰れたような声を出した。

「」いつも知り合いなの。結構な馴染みなの  
「普通、馴染みを蹴るものか」

芽依の眩きに、春樹は少し頷いた。

「えつと……久遠さんでしたか、このクソ生意氣な幼女と知り合いでですか」

「……うあ……そーです……。身内みたいなものです……」

息も絶え絶え。見るも無惨な姿。微妙にスカートの隙間から、白い物が見えてしまっている始末。

女として、思春期の少女として、とても残念なものだった。

「……本当ですか？」

「本当にです……」

糸が切れた操り人形のように、パタリと伏せてしまった。

「起きるの」

ゲシ！

「ぎゃふ

ナインに蹴られ、再び奏は田を覚ました。

「寝てる時間はないの」

「はい……スイマセン……」

そこに、なにやら不思議な力関係が伺いしれた。

「分かつたらいいの。私も鬼でも悪魔でもないの。とても寛容な」

「どこがだ。

「はい……そーですね」

「スコーンー」

再び、ゲートボールスティックが振り抜かれた。

「気持ちが籠もってないのが丸分かりなの。いい加減にするの」「そ、そんな事ありません！」

「スコーンー！」

「口答え、良くないの」

「スミマセン」

あまりの痛さに、奏は苦悶した。

頭を抱え、悶絶の表情を浮かべている。

「ちょっと、そんなもので人を殴っちゃいけませんー！」

見かねた薰が、腰に手を当てて、ナインを注意する。

「教育なの。問題ないの」

「体罰は禁止されます！」

「そんなんだから甘ちゃんが増えるの。教育者として、世知辛い世の中なの」

ナインは、フルフルと首を振つた。

愛らしき容姿とは違い、全くもつて憎たらしき。

「久遠さん、本当に知り合い？脅されてるとかない？考えにくいけど」

7

いえ、本業に知り合いです。

「そう、大変ね。我が儘な娘で」

「ええ、まあ……」

すると、ゲートボールステイツクを肩に担いだナインが、少しずく  
れた。

「訂正を求めるの。我が儘娘と言われるのは癪に障るの」

「事実じゃない」

「断固否定するの」

薰とナインが睨み合い、一触即発の雰囲気が漂う。

……」ちらに飛び火しないうちに帰つてしまおうか。

卷之三

全蜀王

「おで小姑なの」

「アリス」、ウナギ

今も殴りかかるつとする薫を、芽依は羽交い締めにした。

「放しなさい芽依！コイツは、コイツは一度殴らないといけないわ

「…」

「……全く、現代人はすぐにキレるの」「それはナインちゃんがけしかけているからです」「ひがひやややあああ！」

薰の叫びに、ナインは今まで突つ立っていた春樹の背中に隠れた。

「怖いの。まさに怪物なの」「えつ、ちょ」「なんですつてーーー！」

芽依の拘束を振りほどき、春樹とナインに迫った。

「セー！を退きなさい、佐久良 春樹！」「いや、やつ言われてもー！」

盾にするように隠れられて、コッチも困っている。春樹は、ナインと薰に挟まれてしまっていた。

「助けてなお兄ちゃん」「さあ、引き渡しなさいー」「……くつー子供の言うことじやないか。多田にみてやれ」「ダメよ、この時からじつかり叱らないといけないのよー」「まさに鬼畜なの」「このガキ……！」「このガキ……！」

ギヤーギヤーワーワーギヤースギヤースゼーハーゼーハー

薰の体力が尽きるまで、その口論は続いた。  
春樹を間に挟む形で。

「……分かつたわ。もう何も言わない。その代わり久遠さん、しつかり「イツの面倒みてください」

「大丈夫なの。ちゃんと面倒みさせるの」

「あなたに言ってない……！」

まあまあとナインは薰を宥め、顔を春樹の方に向けた。

「とにかく、今田はもう遅いの。泊めさせてもらひの」

「……何故俺を見る」

「泊めさせてもらひの」

「だから何故俺を見る。奏の方に向かって言え」

「泊めろなの」

「……」

「一体どうしようと？」

「まさか、俺のとこ」……？

「せりきからそり言ひてるの」

「……いやいや、奏のとこに泊めさせてもらえよ」

「泊めろなの。三度は言わないの」

そつと、ナインはゲートボールステイツクで、まるで野球のスイングのようすに素振りを始めた。

空を切る音が異様なまでの迫力と恐怖感があった。

「……奏」

すがりつく思いで、ナインと知り合いつて奏に助けを求める。しかし

「泊めさせてあげてください」

笑顔で突き放されてしまった。

「なんで？なんで俺のとこに」

「当たり前なの」

素振りを止め、感情を感じにくい瞳を春樹に向けた。

「兄が妹を泊めるのは当たり前なの」

「……え？」

奏以外、この場にいる人間がキヨトンとした。

「えっと、確かアナタ、校内に知り合いがいるって……」

「いるの。でも、一人とは言つてないの」

「……待て待て、じゃあなにか？ 君は、俺の妹だというのか？」

「そうなの」

ナインは、何を今更とでも言いたげな顔をした。

「……いたのか。妹が……」

思わず、春樹は呟いていた。

突然の家族の出現に頭がついていつていなかつた。

「よろしくなの。」お兄ちゃん」「

いきなりの妹の出現だった。

「……佐久良」

「……夏依、何もいつなとは言わない。ただ 察してくれ」

楠木寮の一室 春樹と夏依の部屋。

本来なら一人だけの部屋なのだが、この日は少し違った。

「寮の部屋にしてはなかなか広いの。とても快適な」

春樹のベッドの上でポンポンと跳ねている幼い少女。日本人離れした金髪碧眼のその少女は、自称春樹の妹らしい。自称なのは、あまりにも容姿がかけ離れているからである。だが、義妹という可能性も捨てきれない。

「ナインって言つただっけ」

「ああ」

「似てないな」

「言われなくとも分かつて。第一、国籍とかその辺が絶対違うだ

る」

「でも、妹なんだろ?」

「……そつらしき」

記憶がないから分からぬけど。

ベッドの上で跳ねることに飽きたのか、ナインはベッドの下を覗き込んで何やら搜索を始めた。

「なにやつてるんだ」

「 まあ な

しばりくじて

「 …… ないの 」

すくつと立ち上がってスタスターと春樹の前に来る。ナインは見上げる形になる。

「 出すの 」

「 何を 」

「 ハロ本 」

「 ブッ 」 ！

何故か動搖したのは夏依だった。

「 持つてるわけないだろ 」

「 そんなはずないの。年頃なら持つてるはずなの。さつさと出せな の 」

「 だから持つてない。というか、持つていっても出すわけないだろ 」

「 …… 巧みに隠しそぎなの 」

すると、今度は本棚にある本をバラバラと一冊ずつ捲り始めた。意地でも探し出すつもりらしい。

元から無いものが見つかるはずもない。

「 …… あつたの 」

「 なに …… ？」

それは本棚と壁の隙間から見つかった。

存在しないハズのそれが、ナインの手に握られていた。

「馬鹿な！」

「キヨにゅーものとは……普通すぎてガツカリなの」

ナインはふるふると首を振った。

「時代今、ヒンにゅーなの」

そんなの知ったこいつちや無い。

「待て待て、俺は知らないぞ。俺のじゃない  
「じゃあ誰のなの」

「…………」

夏依に突き刺さる春樹の視線。

その日は、お前のか?と問いつめていた。

「……ぼ、僕は知らんぞ?」  
「……おい、目をそらすな」  
「さ、佐久良のじゃないのか?」  
「さつきから噛んでるぞ」  
「……しょんなこと」  
「…………」

じと~~~~~つ

「…………」

「…………」

「……三谷だ。三谷に渡されたんだ」

ああ、あの馬鹿のものか。なら納得できる。

「お前も見てみると渡されてな。要らないと言つたんだが、無理矢理押し付けていきやがつた」

夏依は、少し顔を赤らめてため息をついた。

「あいつ、こんな趣味があつたのか」

「誰のでもいいの。とにかく私のコレクションとするの」

ナインは、肩からぶら下がるショルダーバックにエロ本を詰め込もうとした。しかし、バックに入っているものが邪魔しているのか、なかなか入らない。

「おー、お子様がこんな物を貰つする

ひょいと、いとも簡単に春樹はナインからエロ本を奪い。

「返せな」

「いやいや、これはお前のようなお子様が見るようなもんじやない

「お子様じゃないの。伊達に生きてきていないの」

ピヨンピヨンと飛び跳ねて春樹の手から奪還しようと試みるが、絶対的に届かない。

背が高くとも所詮は人間。

木が高くて取れないならば、伐つてしまえばいい。

ガスッ！

ナインは春樹の足を蹴った。

思いつめつま先で。

「 いつたあああ……弁慶の泣き所おおー。」

足を押され、「ロロロロと床を転げ回る。  
そんな春樹の様子を見て、ナインは満足そうに頷いて、床に落ちる  
口本を回収した。

「戦いは、僕く悲しいものなの」

「くつ……お前から仕掛けたくせに何が悲しいだ」

「戦いは先手必勝。常識なの」

なんとも、生意気な娘であらつか。

「……仲いいのか?」これは仲がいいと言つてこいのか?

「んなわけないだろー。」

ナインの眉がピクンと動いた。

「酷いの。ただの可愛い女の子のお茶田なの」

「…………」

「セレで黙るななの」

春樹のスネを蹴る。

痛みで再び床に転がる」となった。

「……まあ、ともかくだ」

痛みもじばりして引か、春樹は立ち上がった。

「「キブリ並みのしぶとさなの」

スルーして聞かなかつた方向で。  
このままでは話が続かない。

「お前は俺の妹だと呟つてゐるが……本当のことはどうなんだ」「どうとせ……どうことなの？」

ナインはきよとんとして、首を傾けた。

「俺の妹じやないだろ？」

ただでさえおつかない田つきを更に細めて迫力を出す。  
そんな春樹の視線をナインは飄々と受け流していた。

「それは、記憶を取り戻せば分かることなの」

いつの間にか握られているゲートボールスティック。  
本来の使い方とは逆に握られている。  
まさに、凶器だった。

「てい！」  
「のわあ！」

ズドン！

その幼い体躯からは考えられない速度で振り抜かれたそれは、フローリングの床にめり込んだ。

偶然避けることができたが、当たつていたらただでは済まなかつた  
だろう。

「な、なにをする！」  
「ショック療法なの」  
「嘘だ！ 振り抜く瞬間樂しそうだつた！」  
「ストレス発散も兼ねてるの」  
「それがメインだろ！ 絶対！」  
「……ウルサいの」

ナインはブンブンとゲートボールステイックを振り回し始めた。  
フローリングは凹み、本棚の本は散らばり、座卓に置いていたコー  
ラは爆発した。

「か、夏依！ 何とか奴を止めるか？！」  
「む、無茶いうな！ お前の責任だろ」  
「といつても……！」 コイツやけに正確に頭を狙つて 一

瞬間、春樹の目の前を木製のハンマーが横切つた。  
髪を数本道づれにし、ゲートボールステイックは壁に壮大な音を立  
ててぶつかった。

「避けるなな」  
「避けなきや死ね」  
「大丈夫なの」

その自信は何を根拠にしているのでしょうか？

「何が大丈夫だ！？ 死ぬ！ 絶対死ぬから！」  
「これぐらいで死ぬ方が悪いの」

「全然大丈夫じゃねえ！」

その夜、楠木寮に春樹の悲鳴が響き渡った。

## 『シスター……?』 2（後書き）

お久しぶりです。月見 岳です。  
更新が月一になつてすみません。  
しかもその割にボリュームないし……

えっと、今回でこの話はおしまいです。

本当は次の話と一緒にはづでしたが、あえて分割する事にしました。  
次話で、区切りをつけたいと思っています。

そして、新たな章として『クライシスまじっく!』（未定）』と  
新たに書き出すか、そのまま続きを読むか検討しているところです。

月一更新となつていますが、今後ともよろしくお願いします。

では、次は次話終了後のあとがきでお会いしましょ!。

## プロローグ4 『暗躍する少女達』

楠木寮で春樹が酷い目に遭つてゐる。……。

夜の学校で事態は急速に動き始めていた。

その中心は生徒会室。

月明かりのもと、そこで蠢く影が一つ。

ひとつはこの部屋の主でもある薰。

もう一つは三角帽を曰深く被る人物だった。

「本部から通達です。滅せよとのことです」

「……………ですか」

「今日は私も参加します。『コンビで頑張りましょう』

「……………」

「どうしました?」

「え……なにも」

薰は内心悩んでいた。

自分がやううとしているのは正しいのだろうか?

これまでやつてきたいつものひと。正しいことをしてきましたつもりだ。

だけど……ホントに?

それは正しい?

それは正義?

正義を盾にした横暴ではないのか?

最近になつてそう感じていた。

今までにない未知の存在である彼は確かに脅威になるかもしない。  
だからといって排除するのは正義なのだろうか?  
なにも知らない彼を排除するのは正義なのだろうか?

これが……今まで信じてきた正義なのだろうか?

「薰さん?」

「……はい」

「見知った生徒を相手にしなければならないことを心苦しく思つて  
いるのは分かります。しかし、これは平和のため安全のための行動  
です」

「……」

「敵対組織も活発化している今、不安要素は排除しなければならな  
いんですね」

正義のために

その言葉は魔法の言葉。

あつとあらゆる罪を正当化してしまつ魔法の言葉。

それは返してみれば責任から逃れるための卑怯な言葉。

だから……

だったら……

私は……！

私は……！

自分の信じる正義の為に……！

ナインが暴れ、少し寝不足気味な今日。その日の朝は少しいつもと違っていた。

「……なんだこれは

下駄箱に手紙。

何故か下駄箱に手紙。

最初に思ったことは、なんて古風な奴がいるんだ。今時、こんな手法をとる人も珍しい。

「……佐久良、それはなんだ」

「見ての通り、手紙じゃないか？」

白い封筒のそれは、宛名は”佐久良 春樹様へ”と書かれている。裏を見てみたが、差出人は書かれていなかつた。

ハートのシールで封をされているのは気にしない。

「そ、そうじゃなくてだなあ……その……恋文なのか？」

「恋文つて……えらい昔の言い方だな」

「うるさい！ どうなんだ！」

「やう怒るなよ……」

春樹は渋々といった感じに封を開ける。そして、中の手紙に目を通す。

「…………」  
「…………」  
「…………」  
「…………」  
「…………」  
「…………」  
「…………」  
「…………」  
「…………」  
「…………」

春樹は悩ましそうに頭をポリポリと搔いて答えた。

「悪戯だろ、これ」

パラパラとわざわざ手紙を受け取って、夏依は手紙に目を落とした。

愛する春樹様へ、

初めて見かけた時、身体に電気を受けたような衝撃を受けました。

それからとこいつも、あなたのことが頭から離れません

私のことを知つて欲しくて手紙を出しました。

放課後、本校舎屋上で待つてます

「…………」

なんだろ？。何故か激しく頭が痛くなるのは。

「……な頭が痛くなるようなに書くのは、多分男が書いたからだと思つただよな」

「……、そつか？……そつとは限らないと想つた」

「はは、まあビーでもいいんだがな」

ハアとため息をつき、肩を少し落として歩いていく春樹の背中は、少し哀愁が漂つていた。

「お、おい佐久良！手紙忘れて」

……行つてしまつた。

夏依は、再び手紙に目を落とした。  
到底自分には真似できない丸つこい文字。

そして内容。

春樹は男が書いたものだと思つてゐるようだが、夏依は女が書いたものだと確信していた。  
理由は女の勘……ところのものがほとんどだが。

しかし、一体誰がこんなものを……？

この学校は、男子校と女子校が統合されてからとこつもの、男子と女子の間でちよつとした冷戦状態が続いている。

そんな状態で告白なんてあるのだろうか？

確かに男女勢中立の立場にある春樹なら考えられるかもしねれない。

「…………」

いや、まさか。

あんなチンピラみたいな面構えだし、好き好んで告白する人間なんて……。

だとしたら、これは一種のイジメ？

「……調べたほうがいいのかな」

夏依は手紙をポケットに押し込んだ。

何事もなく時間は緩やかに過ぎていき、今は放課後。

「俺、なにやつてんだろ」

春樹は屋上にいた。

運動場では陸上部がトラックを走りまわり、近くで練習しているであります野球部のかけ声が聞こえる。

至つて平和であった。

「結局、手紙の通りに屋上にいるとは……俺もとんだお人好しだな

さて、一体何が出来るだらうか……。

あんな痛々しい文面だ。多分、男だらう。  
さて……どうしてやううつか。

……よし、とりあえず殴つておこう。

仮にも、女子がこの場にやつてきたとしても、そいつの裏には多分黒幕の男の影があるはずだ。

優しく尋問すれば口をわるだろう。

こういった陰湿なイジメみたいな事はいけないと身を持って味わつてもらうことにしよう。ふふふ、俺を相手にしたことを、一生後悔させてやるわ……！

少々春樹が危険な思考に陥つていた時、屋上の扉が開いた。

「…………！？」

女子だった。

スカーフの色からして同学年。

見覚えがないので多分、他クラスの人間だろう。

春樹の姿を確認すると、彼女は頬を赤く染めて顔をうずくめた。

……あれ? なにそのリアクション。

「来てくれたんですね」

「あ～～まあ、成り行きで?」

「嬉しいです」

春樹は困つたように頭を搔いた。

まさか、こんな本当に告白みたいな事態になるとは思つてなかつた。予想では、『本当に来たんだ。馬鹿じゃない?』とか『アハハ、キモーイ』という事態になると思つていた。

なのに……

「あの、お手紙を読んでくれましたか？」

「あ、ああ」

「ありがとうございます！」

「なんでこんないい子が目の前にいるんだ……？」

「実は、友達に頼んで書いてもらつたんです。私、文才は全くなくて……」

恥ずかしそうに笑う彼女は、ある意味魅力的に見えた。決して美少女とかいう訳でもなく、ごく普通の彼女がそう見えるのは、きっと彼女の性格とか人柄が魅力的だからだろう。

「変な事とか書いてませんでしたか？」

「変……ではなかつたと思つぞ」

違和感は物凄いものだつたけど。

「だつたらその……既にご存知かも知れませんが……」

彼女は言ひ出しつくそつこ、しばらくもじもじする。そして覚悟を決めたのか、顔を上げて真っ直ぐ春樹を見つめた。

「あのー」

「はー?」

「えつと、その……」

「…………?」

「あの……」

「…………?」

「…………」

始めの勢いもどこへやら。

顔を真っ赤にして俯いてしまった。

「…………無理だよ…………恥ずかしくて死に……死ぬ…………」

「…………あの」

「こんな事なら止めとナガマ良かった……」

「お~~~~~」

何か、置いてけぼりをへりつてこるのが。  
帰つていいだらつか？

「…………」

「…………帰つていいか？」

「まだ、待つてください！タイムタイム！」

帰つた春樹を彼女は引き止めた。

「用があるなら早くしてくれ。ビーセイタズラだろ」「むむむ…………」うなつたらアソコです！

「話聞けよ」

すると、彼女は小声でブツブツと何やら呟き始めた。  
何がしたいんだ？

とこうよつ、帰つていいだらつか？

「…………せき合にこまれる」

春樹が屋上から立ち去り、扉に手をかける。

その時だった。

「isolation area!」

世界が赤く染まった。

「なんだ! 急に田の前が真っ赤に……！」

眼球から出血したか……？  
いや、これは……。

「世界が赤に染まつたと言つべきか……」

今まで聞こえていた野球のかけ声が聞こえず、運動場を走る陸上部の姿が消えている。  
いや……人の気配どころか、鳥とかの生物自体の気配もない。  
まるで、形だけの世界のようだ。

「こいつは一体……」

何故こんな事に……。  
いや、心あたりはある。

「驚きましたか？ 隔離結界ですよ」

そう、彼女だ。

手紙を送り、屋上に誘つた彼女。

農とは思つていたが、ここまでとは思わなかつた。  
また、変な事に巻き込まれてゐるらしい。  
それより、彼女は何者だ？

「君は……一体何者だ」

すると、彼女は口端を上げて不敵に笑う。

「ふふふ、ある時はじがない高校生。そしてある時はやる気のないパンジー店員……その正体は…」

彼女が光に包まれたと思つと、制服からローブと三角帽姿になつていた。

「なんとなんと、魔法使いなので…」

「…………」

「…………」

「嘘じやありません…」

「ダウト」

「だ～か～ら～！」

「ダウト」

「なら嘘つくな」

「嘘なんてついてません」

「ダウト」

「ああ、もう…話が進まない…」

彼女は癪癩を引き起こしたように頭をかきむしった。  
三角帽の形が少し崩れた。

「あなたはこの状況を見て何も思わないんですか！」

「まあ、とりあえず赤いなあと」

「それだけ！？世界が赤いんですよ…異常に思いませんか…？」

「そりや、異常とは思つが」

「じゃあ何で慌てないんですか…少しは慌てなさい…」

「どうやら、彼女はリアクションをお求めだったようだ。だから、春樹は彼女のお求めのリアクションをとつた。」

「……わあ、びっくり」

「そんな感情のないリアクションなんて入りません…」

なんと贅沢な。

「じゃあ一体どうしようと？」

「驚くか、それとも……」

死ね。

タイミングは完璧だつた。

事前に魔力を形成。そして高速で展開し、さらに圧縮。予想と筋道の展開は違うが、合図となるセリフを言つ。同時に、魔力を小さいながらも莫大な熱に変換する。

そして、放つ。

「いっけえーー！」

紅蓮の火炎が標的に向かう。

同時に、上空に潜む仲間の援護の風属性の魔法によってさらに火炎は勢いを増す。

その光景を間近で見る標的は、ただ突然の事に呆然としていた。

その様子では、状況を理解したところで体は動かないだろ？

完全な直撃コース。

想定よりもあまりにも呆気ない仕事に拍子抜けした。

そして、紅蓮の火炎が標的に迫り……爆ぜた。

爆音、そして爆風。

破壊されたコンクリート片が舞い、砂塵に辺りは包まれた。

標的はどうなった？

直撃していれば、瞬時に粒子となり、奇跡的に直撃を免れたとしても、衝撃と飛んでくる破片でダメージを覆っているだろう。魔法攻撃を受けても、スプラッタな死に方をしないのは、魔法少女補正のおかげなのだ。

そして、時間の経過と共に砂塵が晴れる。

「！」

そこには、淡いオレンジ色の光のドームの中に守られるようにしている標的の健在な姿があつた。

「……これは……？」

「一体どうこうことだ。」

周りを囲むオレンジ色の光のドーム。

視界いっぱいに広がった業火に死んだと思ったが、直前に展開されたドームに助けられたみたいだ。

「大丈夫ですか！？」

「まったく、世話がかかるの」

「久遠！それに……ナイン？」

気付けば屋上の入り口のドアが開かれ、奏とナインが立っていた。急いできたらしく、奏は肩で息をしていた。

「あなた達……隔離結界にどうやって……！」

「これくらいで『結界』とは、ちゃんとやらおかしいの。おかしくて笑っちゃうぐらいなの」

「何ですって」

「あまむらん過ぎの。甘々の結界で侵入するのも簡単だったの」

淡々と無表情で言うナイン。

小さい少女の言葉に、圧倒的な力が隠れている陽など気がした。

「あなた達……一体何者ですか？」

「それは言えないの。ただ…そう、例えるなら闇の者なの。到底、アナタ達には理解できないことなの、『古の魔女同盟』の魔女には」

「何故それを！何故知つている！」

「当たり前なの。そういう機関に居れば全部分かるの」

フルフルとナインは首を振り、そして話がついていけずに呆然としている春樹を見上げた。

「彼を消すつもりみたいだけど、アナタ達には到底無理な話なの」

「……アナタ達が邪魔しなければイージーですが？」

「なら、やってみるの」

「ナインちゃん！？」

銃を構えていた奏が、ナインに詰め寄つてするが、ナインにまあとだめられる。

「おい、ちょっと待て。勝手に話が進んでいるとこり悪いが、本人の同意はなしか？」

「こつちは手を出さないの。思いつきりやればいいの」

「聞けよおい！」

春樹の叫びも虚しく、事態は春樹にとつて最悪に思える方向に進んでいた。

「ではお構いなく思いつきつ……薰さん！」

「はい」

空から聞こえた薰の声。

「会長！？」

「……何も言わないで」

「な、なんて痛い恰好を……」

そこには変わり果てた薰の姿があつた。

煌びやかな飾りのつく蒼いワンピース型のコスチュームを身に纏い、先端に赤い宝石がついた杖を持って空に浮かんでいる。

いつもはヘアゴムで纏めているツインテールは、コスチュームと同じ蒼いリボンで纏められていた。

「スプレーにしか見えなかつた。

「好きでこんな恰好してないわよ。下つ端だから仕方ないのよ」

ハアとため息。

「薰さん、香氣に話している場合じゃありません」

「あ、はい。監察官」

一人は、杖を春樹に向ける。

ナインはただその様子を傍観し、奏は恐怖を感じているのか、手が震えながらも、真っ直ぐ銃を構えていた。

「……腕、疲れた」

いや、手が震えているのは疲れたからだつた。

「では 一人で複合魔法を」

「はい」

「までまで、ちょっと 」

「タイムはなしです」

話が通じない。

このままでは意味不明な内に殺れる。

恐怖に支配された春樹は屋上からの脱出を試みた。  
とにかく、屋上のドアから

「えいなの」

ドグシャー！

ナインがゲートボールステイックでドアをぶちのめした。

「何やつてんだあ！」

「見ての通り、素振りなの」

「素振りでドアがひししゃげるかあ！」

するとナインは、フルフルと首を振った。

「分かってないの。今時のゲートボールはまさに格闘技なの  
「んなわけあるかあ！」

その時、薰達の術が発動した。

「「「フラッショファイヤー！」」

「なつ、しまつ　！」

さつきとは比べ物にならないくらい速く迫る業火。

そしてそれは春樹をすぐに呑み込む。

鉄をも溶かす業火。

人間など形が残るはずがない。

そのはずだった。

「……は？」

声を上げたのは春樹だった。

業火が目の前に迫り、死ぬと思った時、その業火が突然消えたのだ。  
衝撃もなく、何もなかつたように。

「……死んでない？」

驚いて春樹は呆然とする。  
だが、驚いているのは春樹だけではなかつた。

「なぜです……何故なぜです！何故魔法が消えた！術式、構成とも  
に完全！なのに……！」

「彼に魔法は無駄なの。だから魔法一極化しているアナタ達には彼  
は殺せないの」

「そんな訳が……あるかあ……！」

発動した火炎。

しかしそれも春樹を前に消える。

次も……また次も……そのまた次も……。

彼女は自身の知る魔法を全てぶつけるが、その全てが無力化される。

「監察官、無理です。引き上げましょつ

「いえ、まだ大丈夫……。古代魔法すら使える氣分よ」

「それはコンバットハイです。現状は明らかに分が悪いです。一度  
体勢を立て直すべきです」

「ダメです。彼をしとめない限り戻れません」

「しかし

「彼は、私達にとつて危険です。今之内に排除しないと、危ないん  
ですよ」

彼女は杖を掲げる。

「Version 2！レイピアー！」

杖が光を纏つて変形し、細身の剣となる。  
そして空いていた距離を一気に詰める。

「 危ない！」

奏が春樹の前に出て 発砲。

彼女の腕をかする。

そんな事すら気にすることなく、彼女は奏に突っ込んでいく。  
まずは、銃を持つ奏にターゲットを絞つたようだ。

「つねおおおおおー！」

「 ひへつ」

発砲、発砲、発砲、発砲……。

連続して発砲するが、不規則にジグザグで接近してき、弾は当たら  
ない。

「 邪魔を……するなあー！」

「 きやあー！」

彼女はレイピアを下から切り上げた。レイピアの先端が銃に当たり、  
銃を吹き飛ばす。

「 restriction」

「 なつ、体が動きません」

魔法によって奏は体を拘束される。  
指の先すら動かすことができない。

「はああああ！」

彼女は一度レイピアを引き寄せ、突き刺す体勢に……。  
そして、一気に突き刺す！

ドス！

「 もせないの」

レイピアが突き刺さったのはゲートボールステイックのハンマー部分。  
ナインの突き出すゲートボールステイックに突き刺さっていた。

「私達に手を出すということは、65億の命を背負つ」とと同義と言つていいの。その覚悟があるの？」

「そんな見え透いた嘘を……！」

レイピアに電属性の魔法を付属させ、電撃を放つ。

電撃は、レイピアが突き刺さるゲートボールステイックからナインの体に流れ込む。

「はにゃー！ ばたんきゅー……なの」

「ナインちゃん！」

彼女はレイピアを引き抜き、その刃先を奏に向ける。

「さあ、答えなさい。あなた達は何者ですか？」

「…………」

「答えろー！」

「くつー！」

レイピアの刃先が奏の首を撫でる。

「助けはない。まだ死にたくないでしょ？」

「監察官、いくらなんでもやりすぎでは」

「薰さんは黙つてください」

奏の首にさりに強く押し付けられた。

「これ以上、コケにされるのは腹が立つんですよー。」

「ですが……」

「シャラップ！ それ以上言つなら貴女も反逆者として……『トリー』

ですよー！」

「…………！」

その剣幕に薰は口を閉じるしかなかつた。

組織の中でも監察官という地位は高い。

若くしてその地位についた彼女の力量は天才的なものがあつた。それ故、プライドも高かつた。

そして、そのプライドが許さないのだろう。

彼女が、怒りに支配され、周りが見えていないのは。

彼女のとつている行動は、正義の味方とは程遠く、むしろ、悪の組織に近かつた。

そんな彼女の姿に、薰は幻滅し、愕然とした。  
信じた正義のその姿に。

「もう一度聞きます。あなた達は何者ですか？」

押し付けられるレイピア。

そして 奏は覚悟した。

「貴女に言つつもりはありません！」

「そうですか……なら、死ね！」

その時だつた。

「別にいいじゃないか」

そんな声が聞こえたのは。

「そんなに知りたいなら教えてやるわ」

ゆらりとした動きで近づく彼の姿の雰囲気は、薰にとつてはいつも見る彼とは全く違つものに感じ、その雰囲気に足が勝手に震えた。

「 ッ！」

そして、以前を知る奏にとっては、彼が本来の彼に戻ってきたことに気付き、ホッと安堵しながらも心中で少し残念にも思った。

「闇に住まつ者といつのを」

そこには、右手に銃を構えた佐久良 春樹の姿があった。

ピンチだ。

とてもヤバい状況だ。

助けにきてくれたのであらう味方が追い詰められている。

ナインは電撃でやられ、奏はレイピアを突きつけられて動けない。

逃げ場はない。

どうする?

一体どうする?

何か、手はないか?

春樹はキヨロキヨロと周りを見渡す。  
しかし、何もない。

「……くそ」

小さな声で悪態をつく。

（とにかく、何か行動をおこさないと……）

そして、一歩を踏み出した時だった。

力チャ

足元で金属音がした。

それがこれからおこることのキッカケだった。

「……これは

鈍く黒光りするそれは、銃だった。

レイピアで弾かれた奏の銃が、知らぬ間に春樹の足元に来ていたのだ。

（ベレッタM92……。それにしてはバレルが短い……）

春樹は銃を拾うと、マガジンキャッチを押して、グリップ部分から滑り落ちてきたマガジンを受け取る。

（残弾は……2発。……ということは総弾数は8発。よりにもよってCompact Mか）

マガジンを再装填し直して、はたと気が付く。

（俺は何故こんなに銃にくわしい？いや、そもそも何故銃が扱える？）

春樹は手に持つ銃を見つめる。

ハンドガン、チャカ、ハジキ。

言い方が様々あるそれは、何故か異様なまでに手になじむ。

「ツー」

頭痛。

今までも時折あつたが、今度のは結構強烈だった。

痛さで声も出ない。

思わず、膝をつきそうになるが、なんとか我慢する。

そして……

今までせき止められていた記憶の濁流が一気に押し寄せた。

思い出すのは 硝煙の香り、血の匂い。

そして……自分の存在。

(ああそりか……俺は……そうだつたな)

本当なら嬉しいはず。

記憶が戻れば、あるべき場所に帰れる。

そう思つていたのに……。

春樹は嘆息した。また、嘆きの吐息だつた。

(結局、世界からは逃れられない……か)

元に戻つただけ。あるべき場所に落ち着いただけ。  
でも、何故こうも胸が締め付けられるのだろうか。

目から流れた涙が頬を伝い、コンクリートを僅かに濡らす。  
知らぬが仏とは、まさにこのこと。昔の人は巧いこといつたものだ。  
記憶が戻つても、いいことばかりとは限らないのは分かつていた。  
忘れていた役割。

忘れていたかつた役割。

なら、仕方がない。

忘れていた役割を果たそう。

……面倒だけだ。

春樹のゆらりとした動き。

いつもの違う……いや、元に戻ったよく知った雰囲気。記憶をなくす前に比べて、随分と棘がなくなつて丸くなつたような気がするが、奏にとつてはすぐに分かつた。

「春樹君、記憶が……」

「ああ、全てとはいかないが、ある程度は戻つたみたいだ」

「……そう……ですか」

「何、お前がそう哀しむことはないさ」

春樹は銃口を彼女に真っ直ぐ向けた。

彼女は血走った目で春樹を睨み付ける。

「そう怖い顔で睨むな。別に危害を加えるつもりはない。言つことを聞いてくればの話だが」

「……状況を分かつてますか？」

「分かつているが、そこの馬鹿の非戦闘員が人質の状況なんだろ？」

？

『馬鹿とは何ですか！馬鹿とは…』と甲高い声で反論する奏を無視し、春樹は続けた。

「それがどうした？ 貴様がたかが人一人を人質にしたところで、何も変わることはない」

そして一步、前に踏み出した。

「う、動くな！ 動いたらコイツを殺す！」

奏の首に突きつけられるレイピア。

しかし、春樹は気にする素振りも見せず、彼女へ歩を進める。

「なにを言つてゐる。もとより消すつもりじゃなかつたのか？」

「……くつー」

「だつたら、人質を取つたことによるメリットは少ない。むしろ機動力低下のデメリットの方がデカいな」

軽蔑するような視線を投げかけ、春樹は鼻で笑つた。

「そんな事も分からぬとは……とんだ素人だな」

プチン

春樹の小馬鹿にした台詞を聞いた瞬間、奏は細いロープが切れたような音が聞こえた気がした。

前を見れば、彼女が顔を真つ赤にしてブルブルと震えていた。堪忍袋の緒が切れた音だった。

「貴様ああああ！」

「きやー！」

彼女は奏を突き飛ばし、春樹に迫つた。

そんな彼女を見て、春樹は顔の印象に似つかわし過ぎるほど凶悪な笑みを浮かべた。

「そりでないと」

ダンツー

春樹は一発発砲。

発射された9mmの弾は音速の倍以上の速度で飛び、彼女の手にあるレイピアの赤い宝石に当たって粉々に碎く。

「…………魔石が！」

途端、レイピアが光を放つて前の杖に戻ってしまった。  
その事に気付いた彼女は急停止。

「貴様等の魔法体系はその魔力結晶の魔力と自身の魔力による発現。  
だったら魔力結晶を破壊してしまえば簡単だ」

「…………！」

彼女が気付いた時には、既に春樹の顔が目の前にあった。

「ハツ！」

かけ声とともに鳩尾に掌底を打ち込んだ。

「ガツ…………！」

彼女の体が簡単に吹き飛んだ。  
無理やり肺の空気が押し出されたことにより、咳き込む。

「所詮この程度か」

「…………まさに、典型的な悪役の台詞なの」

いつの間にか気絶から復帰していたナインが、トコトコと春樹の脇

による。

「確かに……なにも『世界の構造』を知らない彼女達にとっては、俺達は悪に見えるな」

「悪に見えるのは顔のせいなの」

「……おー」

「こんな『ふりていー』な私が悪に見える訳ないの」

では、その禍々しく見えるゲートボールステイックは何なのだろう。

「ちなみにアーメでは、追い詰められた正義の味方は決まって秘められた力を発揮するの」

「そんなわけ」

ああああああ……！－

禍々しい赤い光が彼女を包み込む。いや、むしろ呑み込むと言つた方がよかつた。

「おーおー、お約束すぎるだろ」

「世の中、ヤーハー風に出来てるの」

彼女は禍々しい赤い光を放ちつつ、やうりと立ち上がる。

「さあ、とつとと蹴りをつけてきやがれなの

「いってえー！」

スネを思いつきり蹴られた。

その隙に、彼女が一気に迫る。

今までとは比べものにならないくらいこのスピードで。

「ああ、このクソアマが！」

発砲、そして発砲。

彼女の両脚を撃ち抜くが、速度を落とすことなく迫つてくる。そして、一気に春樹の懷に潜り込む。

「……ちつ、魔力暴走状態か。結晶の魔力に呑まれたな」

レイピアに再び形を変えた杖をかなりの至近距離から突き刺そうとするが、春樹はいとも簡単に交わしていく。

「 遅い！」

下からレイピアを蹴り上げる。彼女の手からレイピアはすり抜けて、遠く後方に吹き飛ばされる。

さらに、もののついでとばかりに彼女も蹴り飛ばす。

屋上のフロンスにぶち当たり、そのまま体を沈めて動かない。

「なんだ？ そんなものか」

弾切れを起こした銃をその辺に放り投げ、ゆつたりと彼女に歩み寄る。

自分の銃を雑に扱われた奏が喚いていたが、今は聞き流す。

「 時間をやる。貴様の全力をぶつけてこい」

「 ……オーケー」

彼女の体がピクリと動くと、ボロボロの身体でゆつくつ立ち上がった。

「その言葉、後悔させてやりますよ」

ローブのポケットから赤い魔力結晶をありつたけ取り出す。杖に装着仕切れない分は、自分の周りに等間隔に並べた。

「遍く炎の水面。等しく注ぐ火炎の光……」

彼女は意味ある言葉を紡いでいく。

そのたびに魔力結晶は反応し、魔法陣を形成していく。そして、意味ある言葉を紡ぎ出すと、魔法陣は完成した。

「全てを統べる業火、『フレア』！」

それはまさに太陽。

凄まじい熱と光。

呑み込まれる以前に、身が燃え尽きてしまつよと思える。

だが……

そんな攻撃を田の前にして。

春樹は笑った。

恐怖からでも、凄すぎる代物だからでもない。

ただ、あまりにも馬鹿らしく、あまりにも稚拙過ぎる代物だったからだ。

魔法？これが魔法？まるで子供の手品じゃないか！

「「」んな偽物が通用するかあ！」

春樹は片方だけ、開いた手のひらを向ける。

バリアとかシールドとかする様子もなく。  
もちろん、素手である。

迫る火球。

それを、あらう」とか春樹は莫大な炎の塊を手のひらに吸い込んでしまった。

「これが全力だと？笑えない。むしろ悲しいくらいだ」

手を確認するよつに、開いて閉じて繰り返す。

「ああ……そんな……」

有り得ないと呟いて、彼女は折れるよつにして膝をついた。  
パキッと音を発して、全ての魔力結晶が砕け散った。

同時に、彼女の変身が解け、制服姿に戻る。

さらに、結界も解除されたらしく、周囲の色と音が戻ってきた。

「……おいおい、もうおしまいか？まだ暴れてないんだけど」

「まあ仕方ないの。骨董級旧世代式の魔法方式であれだけやれたこと自体、賞賛に値するの」

「つーか、吸収した魔力どうじよつ」

ポリポリと頭を搔く春樹の姿は、いつもよつなものだ。

「とつとと放出するの」

「だが、この場所じゃなあ」

「なら、深界に潜るの」

リーン……。

当たりに鐘の音が響き渡った。

いつの間にか、ナインの持つ木製のゲートボールステイックが、銀色の厳かな風格を持つハンマーに早変わりしている。

ナインは自分の身長よりもあるハンマーを軽々と振りかぶった。ぽつりと金色の淡い光を放つ小さな鐘が出現する。

「第三深界にダイブ」

そして、ハンマーを鐘に向かって振り下ろす！

「なの！」

リーン……。

再び鐘の音が鳴り響き、世界が灰色に支配された。

「な、何ですかこれは！？」

驚愕。

「あなたの結界と似たよーなものなの」

そんな彼女を、ナインはふるふると見下すようにして頭を振った。

「まあ、水溜まりとイング洋ぐらい比べものにならないが、ぐらいのレベルの差なの」

いまいち意味の分からぬ例えは置いといて。

「とつあえず、やつとくか

春樹はスッと開いた手のひらを上空に向けた。  
そして、放出。

エネルギーの塊といつていい『何か』が、空に向かつて放出される。  
それは、彼女や薰の知る、魔力とは違う何か。

「魔素<sup>マナ</sup>なの」

「魔素……？」

ナインは、話にならないと言いたげに首をフルフル。

「魔力の源。魔法は、魔素を体内で魔力に変換して行使されるの」

そして、無表情でフツと鼻で笑い、

「そんなことも知らないで魔女っ子とは、聞いて呆れるの」

やがて、魔素の放出を終えた春樹は、晴れ晴れとした表情で戻ってくる。

「いや、久々だからスカツとした

「なら、とつとと戻すとするの」

灰色の世界から、色が戻る。

非日常から日常へ。

「それで、あなた達はまだ私達と争いますか？」

奏は春樹が投げ出した愛銃の確認をしながら、太もものレッグホールスターにじまつた。

スカートの中が見られないよう

「春樹君が記憶を取り戻した限り、あなた達には勝ち目がありません！」

人差し指を突き出し、自信満々に言い放つ。

「ん！」

「偉そうなの

ナインは銀色のハンマーで奏を殴りつける。

「なにも出来ないペーぺーの癖に、生意気なの

「す、すこません……」

やはり、奏はナインに適わないみたいだつた。  
全く、何やつてんだか。

「さあ……」

呆れていた気持ちを切り替え、薰達を見据えた。  
その鋭い目に、油断はない。

「それで、ビーするんだ会長達は？」

戦闘の継続か、否か。

本来の監察官の彼女なら、躊躇いなく戦闘継続の選択をしていただ  
ろう。

だが、疲弊した彼女には戦う力は残されいない。

例え残っていても、一撃を与えることすら適わないだらう。

そして、元々薰はこの任務自体に疑問を感じていた。

正義の名の下に行われた、この暗殺計画を。

本来なら、魔法関連の事を一切知らない春樹を、魔力ゼロのイレギ  
ュラーな生命で、世界に影響を与える可能性のある魔物化け物の類  
いとして、問答無用で抹殺するはずだった。

結局のところ、失敗しているけど。

だが、それが本来に正義か？

問答無用で抹殺することが。

（違う……。正義、じゃない。私の信じた正義は！）

答えは決まった。

「……私は……私は、戦わない」「なつ、薫さん！？なにを」

「監察官。私はあなたがやり過ぎだと思します。あなたの正義は……私の正義と違います」

監察官の彼女が小さく歯を噛むのを一瞥し、薫は春樹の方へ歩き出す。

「それは、私達に対する裏切りと捉えますよ」

薫は歩みを止め、

「どうぞ、『勝手に』

軽く一瞥し、春樹のもとに行つた。

「いいのか？」

「ええ、私は私の信じる正義を貫く」

「それもどうかと思うの」

バツと薫がナインの方を見る。

ナインは、何事もないようにハンマーを肩にかけていた。

「フフフ、いいでしょ。」ちぢも今度は全ての力で潰してあげます

「無駄なことなの」

当然とこりよけた態度が癪に触ったのか、彼女は頬をひきつらせた。

「無駄？どこがですか？」

「全て」

その言葉は酷く冷たかった。

「ふざけるなー！」

その言葉が、彼女の琴線に触れる。

「なら、古の魔女同盟全員連れてこればいいの。それでも、あなた達が勝てる見込みはゼロなの」

「そんなこと分からぬ！」

激昂する彼女を、フツと鼻で笑い、首を振る。

「戦つて気付かないとは……とんだ馬鹿なの」

「……ツ！」

飛びかかるうとするが、疲弊で脚に力が入らない。  
その場で片膝をつく。

「教えて上げるの。彼の力を」

「……」

「彼の力は、『吸收』と『変換』なの。」

「吸收？変換？」

（なら、彼が魔力を吸收したのはそのため？）

「そうであり、そうでないの」

（思考を読まれた　！？）

薰は愕然として、隣に佇む少女を見る。

この少女、何者なのかと。

「彼はちょっと特別なの。魔素を吸収して魔力にするのと逆なの。魔力を吸収して魔素にするの。だから、他の生命体とは違つて魔力は持たないの」

銀色のハンマーの柄で、屋上のコンクリートをカチンと叩く。

「そう、昔から続く計画の中で生まれたプロトタイプ。作られた人間なの」

「それがどうした！ だったら吸収しきれなくなるまで攻撃して自滅させてやる！」

再び、ナインは首を振る。

「無駄なの。彼の吸収の力は無限の力と言つてもいいの。だから、魔力を使って勝つのは、無理なの」

そして、頷く。

「そう、彼を殺すには物理的にやるしかないの。エクスカリバーや、村正、黄泉の三八とかの呪具か神器なら、頑張れば腕くらい持つていけるの」

有名な聖剣と伝説の銘刀。最後の物は、薫には分からなかつた。奏も知らないよつで、首を傾げている。

「魔法で倒そなんて、愚の骨頂なの。彼は、魔力が強い相手ほど、強くなるの」

「じへじへ。

「それでもやると云つなら、私は止めないの。勝手に死ねばいいの」「……へつ」

彼女は、笑う脚を手で抑えながら何とか立つ。そして、背中を向ける。

「絶対にこのままでは済まらない」

ポソリとそう言い残し、彼女は消えた。残された最後の力だつ。

「まつたく……甘チャンなの」

「ま、いいんじやないか？ビツセ無認可組織なんだし、明日には行政監査が入つて潰れるだろ」

「世知辛い世の中なの」

くそ、くそ、クソお…!

なんだ黒い戦闘服のアイツ等は！

いきなり本部に押し掛けたと思えば逮捕だと！しかも、国家組織らしき、この国はどつなつている！

仲間はほとんど捕まつたか無力化された。いつも簡単に。

そう、幹部ですから歯が立たなかつた。

魔法で攻撃しても、それ以上の見たことのない魔法で無力化される。

めでたし、懸念。

古の魔女同盟は壊滅した。

悪の組織でもなく、やがては、いよいよ、この組織

「くそおおおおー！」

拳で木を殴る。  
痛い。血が出てる。  
だが、怒りが勝る。

逃げられたのは偶然。

偶々、本部を出ていたのだ。

「…れも、さつとア イツらが…」

昨日の記憶。

イレギュラー。

そしてバツクの謎の組織。

「のままで済まない。」

古の魔女同盟は自分しかもういないが、  
やがて返す方法はある。  
なりふり構つていられない。

一般人が巻き込まれようと知ることか！  
アイツらの責任だ。

手から流れる血で描く幾何学模様の魔法陣。ありつたけの魔石。

「~~~~~つ」

そして詠唱。

魔物を呼び出す召喚魔法。

魔法陣が光を放つ。

そして……、

現れる魔物達。

スライムや、触手や、狼や、蟻や、……。

うようよと。

異常なまでに。

( ー・多すぎるー )

魔法陣からはまだ魔物達が出てくる。

術式中止しても、魔法陣は一人で展開する。暴走していた。

そして、魔物の波は迫り、

「 あやあああああ……」

彼女を飲み込んだ。

しばらくすると、魔物の波は突如止まり、

魔物達が粒子と消えた。

パン

残ったのは、怪しく光る魔法陣。  
そして黒の三角帽子にローブ。彼女が身に着けていた衣服だけだつ  
た。

## 『メモリー!』4(後書き)

どうもお久しぶりです。

今回で、第一部は終了です。

まじっくがつく癖に、なんで魔法が出て来ないんだよ、と最初の方に思った方はすみません。

本当は、頭の中についたストーリーは第一部なんです。

正義の味方を混沌に陥れる主人公、と行つた感じで。

ああ、作中に出できた可哀想な名もなき魔法少女。いや、ほんとは名前つけるつもりが、出すタイミング見失つただけなんですよ。

さあ、次は第一部。

予定では新キャラ三人!

そして、前作と繋がりを!

なんて構成してます。

目指せお気に入り登録!

一話が長いとか短いとか、あと誤字……は分かってるからよしこして(よくない)、感想とかあつたらお願ひします。

やだと言つ人はポイントだけでも……。

流石に、半年近く感想ないのは悲しい……。  
いや、腕ないから仕方ないとは思つてますけど。

よし、感想が書かれるよつたな小説にしよう！

日々精進！

就活なんか気にするな！

……無理、就活の合間に書こう。

当分、不定期更新です。  
では、次のあとがきで！  
多分、5月くらいか！？

彼が居なくなつて数ヶ月。

組織の様子は変わらない。

ただ、それは表面のこと。

実際は、彼が抜けた穴はかなり大きい。

今まで彼一人が請け負つた任務が、多数の機関員を投入してこなさなければならぬのだ。

ただでさえ人手不足気味の組織。今や、まだ練度の低い機関員を投入する始末だつた。

だが、今は一段落もついた。

組織では一応、彼は行方不明になつてはいる。しかし、もう死んでいるだらうという声がチラホラと聞こえているのも事実。

果てには、同行した仲間と駆け落ちしたという話がある始末。こちらの話は、主に女子機関員の中での話題だが。

彼の行う任務は特殊過ぎたのだ。

だが、死亡という扱いにならぬのは、彼がそう簡単に死んだとは思えないからだらう。死体を確認しない限り。

そつ……だから、生きていると信じている。

そして、今日。

その知らせを聞いた。

彼は生きている。

電話口で、単身で探しに行つた彼女は言った。

だが、彼女が言つには記憶を失つていたらしい。

つい最近、記憶が戻つたが、何故記憶を失つたのか覚えてないらしい。

話によると、発見された時に、頭部を怪我していたらしい。

頭を強くぶつけたかによる記憶喪失。

これが意味するのは、彼が任務中に攻撃をまともに喰らつたということ。

彼の戦闘スキルは組織一。

相手は相当の手練れか、同行した仲間か。

そう、特殊任務に随行した仲間も行方不明。

もしかしたら、組織内に何らかの裏切り者がいるかもしれない。  
これは、まだ上に通さない方がいい。

だが、何かあつたら心配だ。護衛がいる。

……なら、近くで守れば。

そうと決まれば、彼女も連れて行こう。

何せ、彼女は一番彼に忠実だ。裏切る訳がない。何も考えてないのだから。

「という事で副長、今まで使わずに余りに余っている有給とか使つて、しばらく休みます」

「……は？ 今？ 冗談よしてよ

すみません。  
もうしばらくかかりそうです。

鬱陶しい梅雨も明けて、もうすぐ夏といった空模様。制服も夏服と薄着だが、外の暑さは参ってしまう。山奥だから、その暑さも幾分マシなはずだが、クーラーに慣れてしまつたのだろうか。

「それにしても、教室にクーラー完備とは。すごい学校だな」

机にうなだれるルームメイトである春樹は、炎天下のアスファルトに落ちたアイスのようにだらしがなかつたため息をついて夏依は答えた。

「女子高の名残だな。統合の時に取り付けるみつ希望があつたらしい  
「はあ～～、贅沢なことだな」  
「……少しはしゃんとしろ」  
「ムリ」

ぐでえ～～

だらしがない春樹に仕方がないと言いたげに首を振り、夏依は自分の席につく。もうすぐ、HRの時間だった。しばらくして、チャイムが鳴る。それとほぼ同時に担任が入ってきた。

「はい、もうすぐ期末です。皆さん頑張ってください

いつもなら、これで出欠確認して終わり。だが、この日は違った。

「皆さんにお知らせがあります」

苦笑いを浮かべる担任。

「今日は、またまた転校生を紹介します」

その言葉に、教室はざわめく。

またか、他のクラスにすべきじゃないか、なんでこうも多いんだ…などなど。

実際、春樹、奏、と二人の転校生が既にいる。本来なら、別クラスになるはずだ。

「おいおい、そんなこと言つていいのか？ 女子だぞ？」

待つてました！問題ナッシング！いやはあ～！

一気に男子のテンションが高ぶる。

そんな様子を、女子は冷ややかな目で見ていた。

男子と女子の溝は深い。

ただ、春樹だけは普通だった。寧ろ、男子のテンションに苦笑いしている。

この大人びた雰囲気が、女子に好感を持たれるのだろう。顔は怖いが。

「はい、では一人入つてこい」

(二人……?)

転校生は一人でないのか？

夏依は首を傾げた。

教室のドアが開き、二人の女の子が現れる。

スラッシュと背が高い人に、小学生くらいに見える小さな人。対照的な二人。

ただ、一人とも癖つ毛で、目が眠たそつなのは同じだ。

担任が黒板に名前を書いていく。

緑川 いづ菜

緑川 志保

がつしゃん！

派手な音が教室に響き渡った。

春樹と奏が椅子から転げ落ちた音だ。

視線が春樹と奏に集中する。

春樹は、何事もなかつたように椅子に座り直し、奏は苦笑いしながら座つた。

「……あ～なんだ。」ちらは緑川姉妹だ。一卵生の双子だそうだ

「いづ菜です」

「志保です」

背が高い方がいづ菜、小さい方が志保。

「席は、最後尾の一席。まあ、後はよろしくやつてくれ

そういうと、担任はさつと教室を出て行つた。

わらわらと生徒達が一人に集まり出す。

しかし、結局のところ女子が壁を形成し、男子は弾き出されて外野

観戦となる。

(全く騒がしいな……)

クラスメート達の様子にウンザリする。もっと一体感とか協調性があるものじゃないのだろうか、クラスメートといつものは。

自然とため息が出るのも仕方がない。その時、ある光景がふと目に止まつた。

(なんだ……)

春樹と奏が、人の田をばがるよつて、一緒にじそじそと教室を出よつとしていた。

何かに怯えている…… とこより警戒しているみたいだが、何故？二人はそのまま教室を出ると、どこかに消えてしまった。

(一体どうしたんだ……？)

もうすぐ授業が始まるとこで、サボるのだろうか。

(見た目とは違ひ面白いのに)

昨日の夜だつて、律儀に予習復習をやつていたのを見ている。サボるような奴には思えない。

(……まさか、逢い引き？)

自分で思つて、それはないと否定する。

だつて春樹だ。失礼かもしけないが、ありえない。

夏依は首を振る。

(でも、もし……)

学校の屋上で、あ～んなことや～～んなことを一人が……。  
夏依の頭の中でピンク色の妄想が広がる。  
まさか、トイレ！？いや、体育倉庫！？ああ、そんなことまで  
ハツと我に返る。

(僕はなに恥ずかしい想像を　！？)

しかし、夏依だつて思春期。  
ピンク色の妄想が頭にこびり付いて離れない。  
いつの間にか、妄想は発展して、奏の立場が自分に変わっていた。

「　つ！」

あまりの恥ずかしさに机に顔を伏して、机をバンバン叩く。  
顔は絶対赤面している。上げられない。  
いざ菜達を質問せめしていた女子とその様子を眺めていた男子が、  
奇異の目で見ているのにも気付かない。

(うわ～、うわ、うわあ～～)

自分のピンク色の妄想に呑まれた夏依は、しばりくの間、悶々と妄  
想に捕らわれるのであった。

「……ああくそ。お前が連絡することを考慮してなかつたよ」

人気のない体育館裏。只でさえ人の気配がないのに、更に奥の雑木林の中に春樹と奏はいた。

場所的に誰かに見られたら、青春の一ページやピンク色の雰囲気と思われそうだが、当の一人はただならぬ殺伐としていた。

周囲を警戒しつつ、小声で話す。

「連絡……はしましたが、上には通してませんよ」

「通してなくとも連絡したんだろ」

「はい、いず菜ちゃんに個人的に」

「ああ……それが原因だなあ……」

春樹は天を仰いだ。

なんてこつた。うまいいけば、このまま一般人としてやつていける  
と思ったのに……。

「……まあ、とにかくだ。起こつてしまつた事態にどうひづ言つても仕方がない。とにかくどう対処するかだ」

「対処つて……大袈裟すぎません?」

「奏よ。お前は後方にいるオペレーターだから分かつてないのも仕方がない。緑川姉妹の危険性を……はは……」

どこか空の遠くに視線をやる春樹は、どこか齢16の高校生とは思えない哀愁が漂っていた。

過去に、彼をそうさせる何があつたのだろうか。

「完全丸腰は、流石に厳しいなあ」

「は？」

「せめて、ナイフ……いや、鉄パイプでもいいや」

「あの？」

「あの姉妹の挨拶はバイオレンスだからな。特に、妹の小さい方は

ふと、奏は気付いた。

携帯電話に反応がある。事前に設置していた四つのセンサーが熱源を感知すると、その情報が送られるようにしていた。そのセンサーの一つ校舎側に設置していた物が反応した。動物か、それとも人か。

「春樹君、センサーに反応……が……」

「どうした」

「……あの、後ろ」

「後ろ？」

春樹は振り返り、固まつた。

緑川 志保が立っていた。

日本刀を片手に。

「…………」

眠たそうな目が見開く。瞳が赤く染まつた。

日本刀を素早く抜刀し、そのまま春樹に斬りかかる。

「こちへしょー！」

はし！

春樹は両手で刀身を挟む。真剣白刃取り。  
ムチャクチャなことをやつていた。

「流石なのです」

「……いいから刀を納めなさい」

「嫌なのです」

「……」

にたあ……。

志保が狂気に顔を歪める。

次第に、春樹は押され気味になる。

「……ひつ

春樹は舌打ちをした。

どうしようもない焦燥感に襲われた時、一体心を落ち着かせる為に舌打ちをするのだ。そうすると自然と落ち着き余裕が出来た。

「奏！ 武器とか

「持つてません」

役立たずめ！

心の中で思わず毒づいた。

しかし、日本は法治国家。勿論、銃刀法という法律で危険な武器類の所持は禁止されている。

普通、高校生は武器を持っていないものだ。

「……そろそろ、止めよつな

「嫌なのです」

ああ、全く。なんて話を聞かない娘……。

春樹は、ため息をついた。

両手で挟み込んでいた刀身をスッと横に持つて行き、力を受け流す。柄を持っていた手を変な方向に向けられ、志保は力が少し緩んだ。瞬間、春樹は志保の手からスponと日本刀を奪つた。

「……ムウ、残念なのです」

ギラギラと輝かしていた目は、やる気の見えない眠たげな目に戻り、瞳は黒くなっていた。

興味がなくなつたと言わんばかり。

「で、姉の方は……」

「約2・2Km先の山の辺からこじらを狙つてているのです」

「……貴様等、マジで俺を殺しにでもきたのか？」

「違うのですが？」

カクンと首を傾げた。

その様子に、思わず春樹は頭を抱えた。

「何考えているんだ……。とにかく、姉を呼び戻せ」「もう既にいますが」

「うおつ！」

背後に気配なく立つていたいず菜に驚く。

奏も気付かなかつたらしく、目を大きく見開いていた。

「お前、2・2Km先からどうやって……」

「いえ、2・2Km地点に置いているのは遠隔操作用の銃でして……」

…私は近くでデータと照準を合わせただけです

そういうて、小さなモバイルパソコンを見せた。

「ほり、エントーキーを押せば」

ポチッ

5、4、3、2、1

パスッ！

春樹の近くの木に、小さな穴が空いた。

「ね？」

「ねつ、じゃない。そういうのは止めなさい」

「はい」

まだ、姉の方が聞き分けが良かつた。

「それで、お前たちはどうしてもここに

やつと本題に入れた春樹は、田頭を思わずつまむ。

「はい。奏に連絡をもひつて」

自然と、奏を睨んでしまった。

「奏は有事の時に全く役に立ちませんし、護衛といつ」と

「それは”上”から?」

「いえ、通してません。私達は、今までの有給とかを使って機関を休んで姿をくらましつつ来ました」

一応、しつかりとはしているようだ。春樹は苦笑した。

今、機関は更に実働員が減つて大変なことであつた。

「まあ、帰れとは言わない。ただ、一般社会。表の世界なんだから、常識を間際得るようになつて」

「どうは言つてもどこまで通じるものか……。

生まれた頃から闇にいる彼女達は、一般社会に慣れるだらうか。一抹の不安がよぎる。

「とにかく武器は俺が預かる。出せ」

すると出でるは出るは。銃に刀に手榴弾。一体どひひと言つたつぐりいに出でへる。

「これで終わり……じゃないな

その言葉に、一人はピクンと反応した。

「部屋だな」

「ピクッ！」

その反応にため息をつき、言つた。

「全部回収」

その言葉に一人は凍りつき、春樹に迫る。

「あんまりなのです。刀は命なのです。片時も持つていないとダメなのです」

「私から銃をとつたら何が残るんですかああ」

春樹は落ち着かせようとすると、体を揺らされまならない。奏はただ何が楽しいのか笑つてゐる。助けは望めない。

春樹は頭が痛くなつた。先行きが確実に底なし沼に感じて……。

## 『シスターズ!』 2 (後書き)

次回は機関の説明みたいな感じの予定。  
これ以上ない質低下に辟易。  
しばらく自分消えるかも。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9552g/>

---

クライシスまじっく！

2011年1月9日15時10分発行